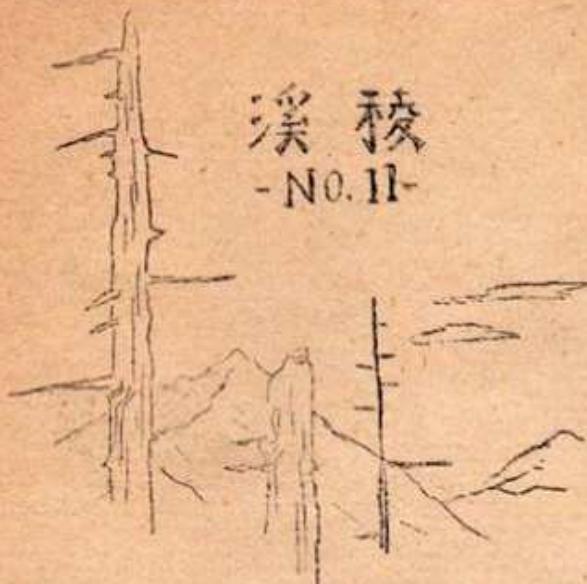


溪棧



1960.2

No. 11



溪 稼

-N0. II-

巻頭の言葉

夏山も熱帯終って早くも冬山の準備だ。
過日、谷川岳集中雪山も多くの会員と賑やか
に、しかも大過なく頂上で合流出来て喜こば
しい。降りの中ゴーリー尾根の相当ことをだけれ
ど、次水でのことをうるほしてにんまり笑、合
つたあの気分はやはり秋々だけのものだ。

いよいよ冬山.. 気分をひきしの技をみかいで
て更に山登りの効率を高めたい。手を取り合
って。

—吉田 泰彦—

会務報告 (53)
山行一覽表 (55)
編集後記 (56)

11



天稟

卷頭の言葉 吉田秉亥
洞沢の夜々夏山の見出マニ 柿沼博

(4) (1) (5)

△対談 ▽会の在り方

(5) 秋晴れの下界の日既

(4) (1)

冬山

△冬山合宿▽

上州武尊山

記録
雜感

柿山
柿沼
縣山
昌正
設

△積雪期谷川岳▽

東尾根
西黒尾根

辻村
勝田
俊昌
満博

△谷川岳合宿▽

一の倉・南稜
一の倉・一の沢

長高
井倉
宏良
子輔
(18) (17)

春山

谷川岳の晩 江勝四郎 (20)

H氏への手紙 柿沼博 (50)

△絵と文△ 山を送る 江透 (49)

△仲間を語る△ 柿さんのこと 昌矢 (52)

後立山縦走裏話 簡井滿栄 (48)



夏 山

△南アルプス全山縦走マ

△御天生活マ
一竜ヶ岳より三伏峠へ
三伏峠より聖岳へ

△廻天生活マ
一竜ヶ岳二尾根・達谷ウラツク尾根
荒川北沢より北岳へ

△其子北丁合宿マ

後立山縦走 + 白馬う五竜 +

オ一曰・ニ曰
オ三曰
オ四曰

オ五曰・六曰
白馬う鐘温泉

吉近長小岩

山管篠原健二

吉田桑矢 柿沼

野藤井林井

山縣昌彦

吉田桑矢 柿沼

富澄宏敏正

辻勝四郎

吉田桑矢 柿沼

子江子子江

山縣昌彦

吉田桑矢 柿沼

(47) (46) (46) (45) (44) (44)

(40) (35) (33) (32)

(30) (29) (25) (22)

涸沢の夜

柿沼 博

涸沢で迎えた最後の夜の月の出は、実に素晴らしいだった。
才七号台風後は山も急に秋色を感じさせ、秋々の周囲に張
られていた天幕も一つ二つを山を下つて行き、今後はつゝ
に我々の天幕の代には、次の方岸に喰二つの天幕が沂しく
残された。

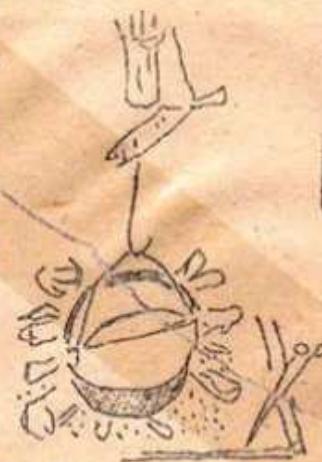
昨日、今日と歩の声も消えて来た。
夕食後、テントの外に出て大きなくじに腰をかけて星空を
眺めてみると、南穂北尾根の稜線の向う側が異様に明りさ
と寧つて来て、尾根の滝本の隠紀ヶ原がシルエットに照ら
出された。見る／＼うちに、青白く輝く大きなくじ管の頭が
尾根の上に顔を見せた。

月だ。

私はぐん／＼と大きさを増し、壁に完全なる背びくのみ
やく円盤となつた。あたりは急に暗るくなつて、見上げる
涸沢の大カーネルに埋めつくされた雪深は、秋の積に見入
被りれて洋銀色に光り、次の流れは蒸氣のきらめく七十七
を水面に躍らせ、今までの光景を一変した。
私はその在原さに助をもてず、暗いと月光に照らされ
ていた。腰かけていた岩肌の冷たさを感じた時、音、知れ
ぬ感覚が全身を包んでいた。



会の在り方



前年秋「会の在り方」と銘うつて座談会と討論とそつが論席を待つたことがあつた。これは要約されて会報十号にも記載されていゝが、その中ではいくつもの反省・要望は出されていなかつたようである。そこでK・T両両名に筆を取つて改めてこの問題についてザックバランに詰し合つて廻ることにした。

X X

我今もこの次で完結してから添三さんたが、近頃の会活動の状況はどうなつて、相變らず山行團、会合面を通じてかぎらね

山語会
B そうだね、山語会の出席を望んでいたからもある。殆んどが頼りと海を見せなかつたりする。
T 今のところ会の山行は山語会の席上で練られているんだから、山語会の出席状態の悪さという事は、そのまゝ、金山行の不振ということにも括ひついてしまつた。
K 大体無断で欠席するといつのは無責任だと思わないか。
T 山語会に出席することは会員としての大きな義務なんだ、といふ自覚がないのが、勿論会員を私うこともやうだがね。

会議
B 会費を納めることも大変だが、会の為には何人と言つても大事なことなんだから前掛といかなくとも、毎月キテンと納めてもらいたいな。俺と奥留えといつてころだが、これは余り大きくなれては言えどい。(笑) ところで山語会の内容はどうだらうな。
T ひと頃から丁れば、事務的な詰じも委報長く片付ける林には少しだけれど、未だいくらでも研究、検討の余地がある。大体研究部門で改めつて記も有耶無耶になつてくまつたし、幹事の持回りもさへよく実行されていないようだな。

山語会
B そうだね、昨年の分まで残つていふ野郎が毎度いい因縁で後を出す。(笑) そんな奴に限つて、豪傑本で残して是子をキレイに平均で帰る。(笑)

ト それから山詔令の時間が延長され
ブルーズだね、毎度く時間厳守と書
いてあるんだが、もう慢性になつち
て教官とは時間に遅れる事と心得て
るんだね。(笑) 大体遅くなると女
の人が困る、仕事でどうしても遅れる
時は仕事がないが、これは皆ながら反省
すべきだろ? ね、ところぞ山か上
にも三年といいか、会送を振り返つて
ねてどうだろう。

ト 今迄のことは
の ど

ト 実に目をくるしがつたね 金剛
は日々暮る。没収構成は並ぶ、会活動
について行けない者が次々と脱落する
、満足な年間計画も立てられない。そ
して中止市出連のこともある。一年
正直なところ無我無中だつたね、おう
れく済る者が残つて、地に足を失し
ゆめたというところだらう。

K お互いに樂しまなかつたね。

ト そうさね、大体愚口っぽくなる
が、俺がよなとは没収の当初の発起人

じでないんだ、勿論山詔令を作つて貢
て、いこうなどといふ自信があつて始
めたわけじゃない。発起人の意図がど
んなところにあつたのか判らない、そ
ん手会を作つとも思われなかつた僕が
どう「深縫」の洞の中に巻き込まれて
その先導を務めなされながらたん
だから、今から思えば人並みの苦労は
したということになるかな。

K 何んでもそうだが、筆始めとい
うのは筆じやないからな。

ト ところがそれが会の本筋でも

ありますし、同時に種所でそあるんだね
。人の如と書つたつて便益のそれば
未だ御座ゐるお互いの責任感の上に
立つた人の如ではなしんじわざいが
。本当のところ僕は陰体を甘じか
していろんだ。会務を見たつてそう
だろう。皆が協力してやろうと言つ
んで今年から委員会制を採用したん
だか、これだつて没収構成の形式が
変わつただけで、内容は相變らず一詩
の者が苦労していきんだからな。

K 確かにまだ上の者がやつてくれ

て笑いだけの覚悟が必要……ええとこ

物れすいな

るだろうという勇方すかせの堅持が強
いね。陥れたら何とか自分の力でや
つてみようという責任感がないんだね

、さは会の創立当時は「山の会を運営
下さる」という言葉が、どんなに難し
いものであり、どんなに個人ノイの主
治ご攝理になればならぬものかと

す もうどもこれは一西無理な
いことそあらんだよ、俺達だつてほ
のかれでオーツドゥフスを登山つて
ものをたゞぞ込ませて来たわけじ
ない、別へは岩登りとやらつて古づ
いたつて、自己流の俺達にはゲレンデ
で理論的な本著付はられた技術と教
えをなんて争が、どうもあのもうな
んだ、それでつい冬場につれていつ
てしきり結果になら、実際には不當
で訓練なんか出来へこないんだが。

T 俺達の会議は、どいつも人が戻
ぐて大人しいんだが、それが所には無
氣力、急激のなさという事、稽古つい
てしまうんだな、こんな事多めじれた
ら「何と云つて夏流して来るふう子娘
が色々くつちやだめだね」(笑)

民 実はこゝに「出入りの一ニ六号
があひんたが、こんな事が書いてある
よ。(前略)新しく呑東りと工口・会
議モ一〇頁あたりでは頗るに出しな
がら、いつの間にか消えてしまつたよ

うふえしくこの名を見ない、山岳会、
という名のグループが何と多いことだ
う?。(中略)もし山岳会というものを
一時的な親睦団体としてそよなく、並
くまでも本筋的等そのとして育てゝ行
きたいという意圖があつたら、たとえ
連中で仲間が三人になつても希望を信

す もうどもこれには一西無理な
いことそあらんだよ、俺達だつてほ
のかれでオーツドゥフスを登山つて
ものをたゞぞ込ませて来たわけじ
ない、別へは岩登りとやらつて古づ
いたつて、自己流の俺達にはゲレンデ
で理論的な本著付はられた技術と教
えをなんて争が、どうもあのもうな
んだ、それでつい冬場につれていつ
てしきり結果になら、実際には不當
で訓練なんか出来へこないんだが。

K 例へば山行面でも反省丁々度事
があると想う、俺達は実際今迄じき
なんできと全然やつて来なかつた
が、これなんかも今の会の甘さつてこ
とを助長する結果になつているんかも

(笑)

T こいーは跋扈になりそうにな
(笑)

だな。

K 例へば山行面でも反省丁々度事
があると想う、俺達は実際今迄じき
なんできと全然やつて来なかつた
が、これなんかも今の会の甘さつてこ
とを助長する結果になつているんかも

す もうどもこれには一西無理な
いことそあらんだよ、俺達だつてほ
のかれでオーツドゥフスを登山つて
ものをたゞぞ込ませて来たわけじ
ない、別へは岩登りとやらつて古づ
いたつて、自己流の俺達にはゲレンデ
で理論的な本著付はられた技術と教
えをなんて争が、どうもあのもうな
んだ、それでつい冬場につれていつ
てしきり結果になら、実際には不當
で訓練なんか出来へこないんだが。

ひいて会として初步の段階からビシビンと諄を上げていかなければ何時までつても頬りにならう。だが生半較ないし、何時でも足をすぐわれる結果に至る。そう云う意味で、これから現在の「ケーラークラスの再教育」ということをお詫びしてい。

バ すねてえと、僕なんかもこれほど大きいにしがれう口たな。

ト をうぬう頭だ。覺悟しようや。(笑) ところで先程、深枝は危険に立っていふと言つたが、

高橋 ど う こ と
ト 同じでんだい、それはお前が呑つたんじやないか。(笑) おおかたの上にも三井と言うが、俊遠のそれが無れ、急中の朝同だつた。そして冷蔵に寝え込み、「めて見ろ」と、色々な欠陥が目について来る。改めて会と連絡していくが如くが如何に容易じやないかってことがあつて来る、て事実を書いたいんじやないか。(笑) これは他の会の一般

的現象だし、俊遠の会たつて例外じやない。本格的危機は今迄じやなくてこれまでからやって来るんだ。それは勿論会に關係あることだが、実は個人の危機なんだね。何時だつたかの山詫会で、僕が山を怒鳴つたことがあつたう。

K あゝ、鹿沼の打合せの時か

T あの時「強制されえんだつたら会を産めますよ」という言葉尾をどうして、僕が「もう少し協力したらどうだ」つて高相子で怒鳴つちやつて、後で少々大人気ないと後悔もしたんだが、あの時僕が言つたのは、実は

「協力しろ」つてことでなく「努力しろ」へてことだつたんだ。誰だつて程度の差こそあれ、社会に出れば学生時代のような山登りなんが出来なくなる

T そうなんだ、そしてそう言う段階に来れば「山も好き」なんてことは言えなくなつて、そつと一途な「山が好き」という状態におかれるとなる。特に俊遠は技術的にも

色々乍割約につき当るようになれば、或る程度の犠牲や、困難を排除するだけの氣構えを持たねばならない。殊に我々クラブに入っている者は向更なうのだと、多くの者が学校を出るに急に山来る。

に登らなくなりるのは、そんな壁にぶつかつてもつと安易な方向に進んでしまうからなんだよ。

K 僕も思うんだが、学生時代の山登りというのは本物じやなかつたと思うんだ。麻雀や外の遊びと同じようにやうと思えば何時でもやれる。要するに暇つぶしだつたんだな。

。容易に手に入らないものを真摯になつて求めていこうとする時、初めてそのものへ持つ価値が判つて来る、「登山でもそうじやないかな」。

(詩)

秋晴水の下界の日暉

(M・Y)

底抜けに青い空

四肢は遠い山の靈氣を感じ
山に意が来て心はうすく

友よ君は今白き豪沫を浴び

岩を踏んで稜線を見上げていようか

その稜線の上にこの青空が
もつと青く広がつていよう

友よ君は今白き豪沫を浴び

岩を踏んで稜線を見上げていようか

君に示りそゝぐのだ



「危機」と書つたのはそれのこと
なんだ本。癡達の仲間をあいにく社
公に出で、そしてそんな連中が、本
當に渓谷に残つてやつて、こうこす
る間、初めて、渓谷の眞の姿が古
てまうのだろうと思う。ところで、
今お採石で渓谷を犠牲していく方榮
は？」

「さてお、公の機構の改善という
事も当然考えれば守らね、だろうか
、たゞ少くはにの優秀山岳会の形式
をしてゐ、微おもうこゝのではな
いと思う。下子に直指した行動はと
るべきでないし、便益には優先考慮
自を行き守がめつていい。まあ、予
れにせよ我々はこれからの方は、
多度不満でには皆で話し合つて結論
を出していこうぢやないか。

K つまく通りやがつたな。(笑) ま
たこゝ討論の結論は、ともかく皆で
努力し、協力してやつて、こうとい
う事に至るかな。

に入った。尚これは現役との合同合宿である。

行動記録

12月28日(曇)

山縣外現役三名、一セー。木の前進キヤン、地奥に荷上げ。残留組は下でスキ。

12月29日(雪)

昨夜未の雪で小屋わきの我々の天幕も大部変形する。今日は柿沼、篠原、楠山外一名、前進ヤマン。地まで荷上げの日。嫌な日に当つたそのだとボヤキ乍ら出発する。あたり一面の新雪に腰上までに及ぶラッセルを強いられ改めてそのアルバイトに驚する。だが未踏の雪面に新しいトレースを印する気分も又格別。全員ファイトを振りしほり無事二回目の荷上げを成し、早くこの雪もやんでもらいたいと念じ、下山する。

12月30日(晴)

テントから這い出て見ると昨日からの雪も止み、頬つても辛い快晴。昨日つけたトレースが程んどそのまま、残つていてるので大助り。山縣、篠原、楠山、地現役、一セーの冬山経験の全般的なレベルの低さということが考慮され、全員参加の建前から、小屋のある、スキーオ出走の初級者たる上州武尊山が選定され、十二月六日から七日にかけての建、楠山による偵察及び小屋との接觸も終つて、いよいよ二月二十八日から上の原國鉄山の家をベースとする合宿

○冬期合宿○

上州武尊山



- 記録 -

楠正毅

期日

三十三年十二月二十八日(一月四日(八日間))

Mem

C.L.山縣、柿沼、大武、筒井、辻高、菅野
、篠崎、近藤、岩井、内口、麗江、村田、斎
藤、柴瀬、楠山、篠原、小林、長井、野田、

(以上十九名)

#

昭和三十四年度正月合宿は、会の冬山装備の不備、会員の冬山経験の全般的なレベルの低さということが考慮され、全員参加の建前から、小屋のある、スキーオ出走の初級者たる上州武尊山が選定され、十二月六日から七日にかけての建、楠山による偵察及び小屋との接觸も終つて、いよいよ二月二十八日から上の原國鉄山の家をベースとする合宿

快適。

12月31日（晴後雪）

舞原、涌山、現役一名登頂。四時起床。冬のテント生活にも相当慣れて来たと言うもの、やはり夏山とはちがつて水づくりには苦労する。六時三十分出発。晴れてはいたが朝焼けがしてるので、何とか午前中に降られぬ様。ピッヂと上げる。沖武尊頂上の展望は絶佳。剣ヶ峯まで足を延しかけたが途中で断念下山。布沼、山縣前進キャンプ入り。思つた通り、午后から天候悪化して雪となる。下の山の家では夜遅くまで年忘れの酒宴あり。

1月1日（曇後雪）

山縣、布沼、二度沖武尊まで往復。オトソ気分ならぬ二日酔の辻、齊藤、保原の三名、ふらりと午后前進キャンプ入り。交替して山縣、布沼下山する。午后になつて派遣会員多数入山し、ゲレンデにてスキー練習。

1月2日（晴後雪）

辻、齊藤、保原、吹雪の沖武尊往復。大武、筒井、菅原、奥口、篠崎、麗江、涌山、BCを出発し前進キャンプに登頂を済せた辻バーテイに会つて新年の挨拶。その後、沖武尊に向う。森林限界奥を過ぎて稜線上に出たからか吹雪となり、トレースも全く消えて苦労する所と少々武尊の頂上に立つたが、とてもたまらず逃げる所に下り、麗江、涌山、前進キャンプに残り、他はBC

Cへ下る。

1月3日（晴）

昨夜は一番辛かつた。ラシユースが二台とも故障し、飯を炊けず携持食をかじつて何とか生き残がらえる。濡れたものも乾かせないので、たゞぶらく震えているだけである。下から登つて来る連中が待ち遠しい。夜のこんなに長く感じられたのもこれが初めて。11時頃下からのパーティの姿が現われてホッとす。食事の後十名（辻、篠崎、麗江、村田、巣瀬、涌山、近藤、小林、長井、野田）連立つて登頂。村田8階カラマンが後に午後になりして忙しい。頂上での展望は今日は素晴らしい。尾セードなどしながら腰懸かに下り、前進テントを撤収して全員下山する。この晩は後援会員全員が来り、小室のダンロと囲んで新年宴会となる。この合宿中もつとモチい夜であった。

1月4日（曇）

大武、岩井、外環役一名登頂。残留組ゲレンデにてスキー練習。午后、山縣、筒井、菅原、湯の小屋へスキー下山。辻、篠崎、涌山頂山から帰浦、残りは小屋の附近で雪上の滑走停止などの基礎練習。

1月5日（晴）

全員下山

武尊合宿についての雑感

山縣昌彦

一、山の選定

今日は初めての冬山合宿でもあ

り、装備も不十分であった関係上、
容易な山が選ばれたわけである
が、次回はもう一歩前进させたい。
二、スケジュール

ラッセルワーカー、前述テント、
登山、そしてスキー練習等と大体
うまくいったと思う。たゞ現役との
合意という形をとつたため、大部
現役におんぶした結果になつた。
現役にとつては有益であったが、
会としては一考を要しよう。

三、統制

この合宿では良かつたと思うが、
会の合宿ではとかく細部までの
統制が不十分の傾向がある。例へ
ば食料（当番）、装備、会計等が

リーダーの指示のもとに全体をしつかり括り、能率よく運営することが必要である。その大会の現状では合宿への参加期間が会員によりまちまちなのが、合宿の運営を難しくする最大原因のようだ。

四、技術面

ラッセルワーカーは最初の二、三日
だけで、後は多量の講習を重ね、後
つてラッセルの味を味わえなかつた
者が大勢いるのは残念。ピッケル、
アイゼン技術もあの山くらいではす
くと各自考えて欲しい。服装でも細
かい所まで工夫と研究が必要。装備
は余裕を以つて、必要な行動を遂
行するにはどうすればよいのだろう
かと各自考えて欲しい。服装でも細
かい所まで工夫と研究が必要。装備
も又然り。そして初冬、から春にかけ
て各自が自分の力に応じた山を送り

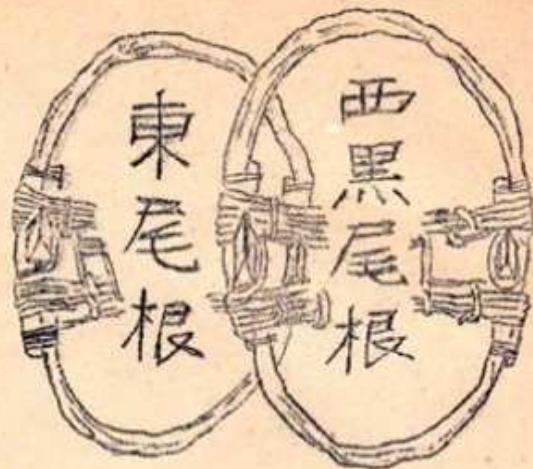
、山行の圖を塗ねて冬山に馴染むこ
とが是非必要である。その意味では
今後の山行計画が今迄は全く不十分で
あつた。スキートは兎つた子り皆消
れらようだ。勿論ゲレンデスキーと
してはお恥ずかしい程度だが、我々
の目標とするのは山の為のスキー
のだから、これからは角を背負つて
のツアートとしてやつて欲し
い。
五、冬山への道

前記のようす所講技術面はともか
くとして、冬山にはどんなものなりと



○積雪期 谷川岳。

跡を廻上へとたどる。
雪の表面が硬化してい
る為、思いの外、輸か
んが沈まず高麗を稼ぐ



西黒尾根

村田俊満

朔日 二月二十二日

MEM

山縣昌彦・柿沼博・村田

俊満

冬山の魅力をたずね、お手近な谷川
山へと足をむける。土合より数珠つな
ぎの登山者に混り、西黒尾根旧道出合
へ到着。積雪約二メートル、こゝで一
の倉一の沢の辺、橋山班とも別れ、道

駆より約二時間、東
の空が明るくなつて來
た。時々小雪がちらつ
いていたが、たいした
事はない。土合に下り
立つた登山者も皆何忍
かを散つて我々三名の
み、誠に静かな登行が
樂しめる。朝日が我々
を輝らす頃、相當高度
を上げる。大きなブナ
の木の下で早朝食を食
べ、樹林帯を抜ける。

ゲレンデスキーハどうも苦手だ。シ
ールをつけてエツチラ、オツチラ汗を流
して登る方が不器用の僕には向いてい
ません。下りはスキーを脱いでかづ
いた方が早いけれど、脱ぐのが面倒だ
からつけっぱなしで下ろう。とたんに
オキの耳の峰が見え始
もうと共に、寒風が身
と判す。

冬山合宿雑記

柿沼博

元旦の朝は雑煮の代りにお茶とドーナツ三ヶ、そして雪を踏んで武尊の頂上に向つた。廻上で「年の始めに」と大声で歌っているY氏のヒゲ面が子供みたいだつた。今年も又何もしないで山に登つて終つてしまいそうだ。まあそれもよがう。あきらめろ。

大晦日の夜は雪の後霖に、天幕の中で過
した。思えばこの一年よく山に登つて暇と
つぶしたものだ。いつの間にかい、年
になつた。そつとあちこちの山に登つ
て見たいから長生きをしよう。

ラクダの背を遞きる頃、雪面も氷結

しアイゼンの爪も相当効果を現わして
来る。ピツケルとアイゼンのコンビネ

ーションでサンゲ岩壁を過ぎ、冬山な

所の複界に満足し、頂上へ急ぐ。

頂上肩の小屋は半分雪中に没し、警
報の海そのシッポが風で、激しくゆれ
てゐる。我々たゞこの頂上に、あの
奥山の混雑を見みすべもない。

十分な展望と寒風に別れを告げ、天
秤尾根を下降する。こちらは前面で、

風の当りが少ないので、雪がくさつてい
て、輪かんを使用しても膝までぐる
る。然雪期の天秤尾根は、起伏が多いが
、一歩雪でうすると起伏がなくな
り、なだらかなスロープに一転する。

このあたりかなスロープを駆け下りる
氣味らしさは又、冬山の魅力である。
天神小屋の附近で、スキーツアーのパ
ーライと会う。

小屋の煙を左に見て、小守沢床を
下り、谷川温泉に到着。旧知の旅
館の浴槽に飛び込み、今日の汗を洗い

流し帰路につく。

東尾根

辻勝四郎

期日 二月二十二日～二十三日

McM 楠山正毅、辻勝四郎

出合の避難小屋のベンチから身を起
してみると、小屋一杯に座っていた
登山者のあらかたは姿を消して、窓か
ら見えみ白毛門の脇には、もうあごや
かな朝の陽が昇り始めていた。齒の沢

の中央壁の初登攀を狙うというJ.C.
の古川純一等が物々しいいでたちで
小屋から出ていくと、もう小屋の中に
は我々の外には誰も残つてはいなかつ
た。

アイゼンを着けて出発する。今年は
暖冬のせいか、底雪崩も早くやつて来
ていて、本谷には一の沢の出合の下方
から、疊やたらデブリの押し出しが続
いていた。

こへ一、二年未足に、その最盛期を迎
えた積雪期の一の倉沢、そして好天を

待機していた今日の、これは又、何
と物凄いラッシュだろうか。鳥帽子
の南稜、奥壁に、コップ正面に、そ
してあの绝望の壁、衛立沢の正面に
までも、既に東部の一派アライマー
が、その基部から華々しい奇襲を開
始していた。既に活動の場を失な
い始めたいわゆるスーパーアルピニズ
ムの最後の焦りにも似た、それは集
められた姿でもあるのだろう。

一の沢に入るビデブリはや広く沢
筋を埋めていて、左岸の黒々とむき
出されたスラブが、荒々しい底雪崩
の跡を物語つていた。ラツセルを観
察していただけに、固いデブリの向
を縋つてグンぐんと稼げる登高は有
難い。やがて悪に左折するとデブリ
も消えて、傾斜が増して来るビアイ
ゼンが快速に効いて来る。ラユルン
ドの小さいのが出来始めているのを
見ると「今年は雪の消えの早い
な」と思う。何時も苦悶する大滝
も雪の下深く埋もれていて、左岸の

トラバースルートが雪面の高さに続いているのを見ると、今更乍ら上越の豪雪には舌を巻く。空はきれいに晴れ上つて、仰ぎ見る彼方にはあの特異な鏡いシンマンの岩峰が見えて来る。

左幸のスラブからのプロックの崩壊を警戒し乍らジグザグに高處を移ぐと、雪面に霜不が現われ出して、それを

段々に氷結した急斜面をダイレクトに駆け登ると、澄んだ青空とのコントラストも鮮やかな西黒の長い雪尾根が、突然脳の中に飛び込んで来た。ランセルのコルである。

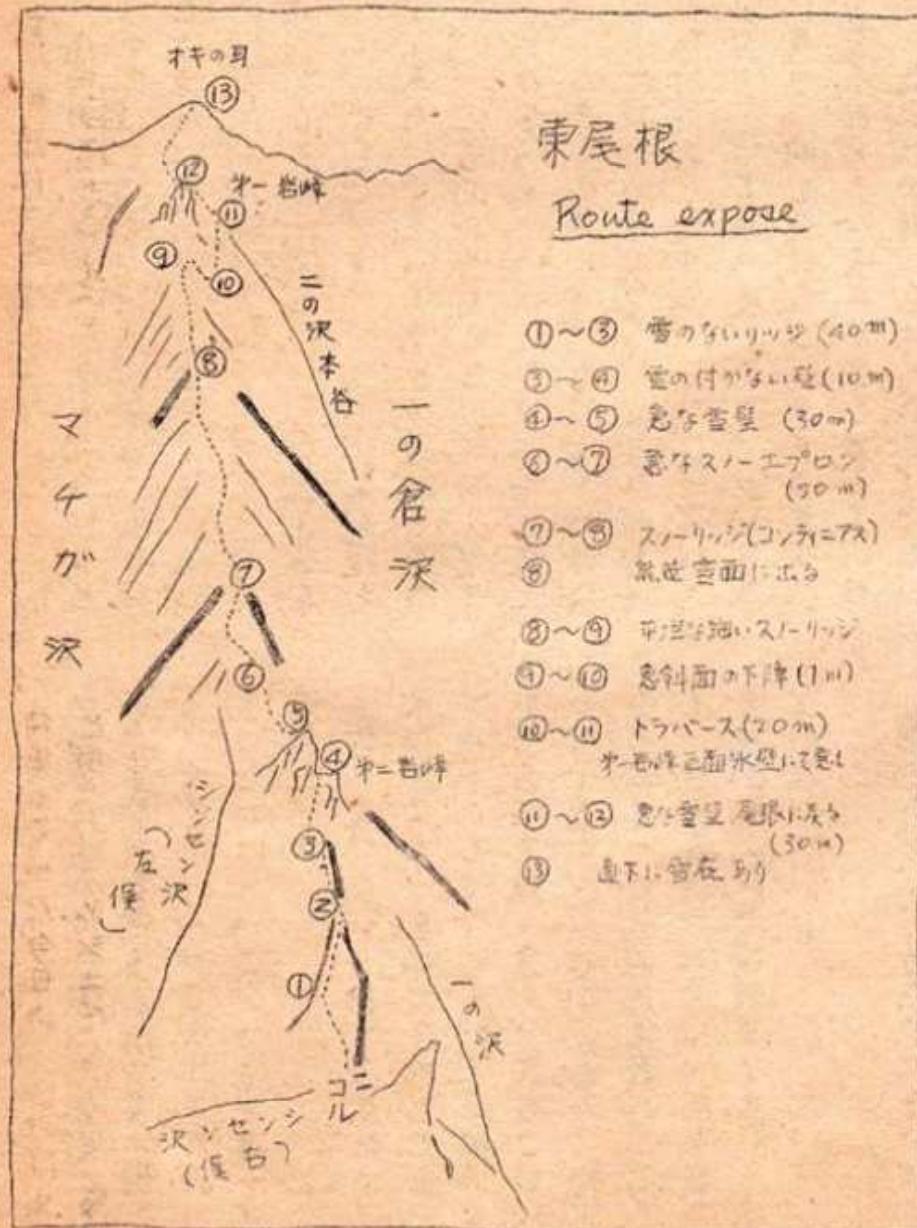
遅れたLJを行つ廻、別動隊のYさん達のいろいろ西黒尾根に信号を送つてみる。それにしても何と暖かい日だらうか。陽はざらくして雪面に照り返り、時折無意味な雪崩の音と、先行パーティの打つ澄んだハーテンの音が、あたりの静けさと破つてゐる。今日の雪尾根は岱々の外に四パーティが前後して走つてゐるという賑やかさである。

LJの到着を待つて早目の昼食をとる

。間もなくシンセンの基部からトレースを授けて来た東芝山岳会のパーティがシンセンの岩峰上に姿を現わしたので、我々ものんびりした腰を上げて、再び行動を開始する。

シンセン沢上部の霜不を手掛ける

とトラバースが終ると、雪の消えたリツジに出る。(注)これは無雪期のルートとは軍、なるマチガ沢側に添ぬ(たよりツチである)アイゼンを置けていた今日は慎重に行動しようとして初めてアンザイレンする。



リツシモニヒツチ登ると、マチが側に
立った高度感のある壁（オニ岩峰）に
出る。雪だけ水の流れるじめくとし
た冬の東尾根の悪場である。ここでアイゼンと着けたまゝ登つたものかどう
かと、しばし思案する。ようやく登り
口で大を迎えうぬ、後続の東芝パー
ライが追い付いて来た。

あれ程晴れていた空には、既に薄硝
の様な雲が拡がり始めた。こゝからは
雲の付着も多くなつて、細いスノーリ
ツデ医、急な壁を丹念にステップを作
つては登るスター・カットが繰り返へさ
れど、忍み壁の付かない岩が出ていて
、そんなスラブ状の岩の上をアイゼン
のまゝ登つたり、トラバースしたりす
るのほ余りいゝ気分ではない。今日は
東尾根の途中で、訓練を兼ねてビバー
ク一ノナという事で準備をして来ただ
が、もう一面に脳つて今宵は雪になるか
も知れないと思うと、不一バー・シュー
ズを履いていない靴の中も濡れて来た
ので、ともかくも明るい内に肩の小屋

まで行こうという事になる。

熊笹の見え始めた斜面を登り切ると
、尾根はしばらく平坦になる。足を交
互に踏み出さないと通過出来ない両側
の切れ落ちた細いスノーリツデを、冷
やかに下り平衡を保つて通過すると

、やがて前面にオニ岩峰の氷壁が現わ
れて来た。東芝パー・テイの通過を待つ
て、一の合側の急斜面を足でステップ
を探り下らぐ、ハ木程下り、二の段上
部をトラバースして、ザイルが一杯に
なる地氷から直上する。こゝは相当な
急斜面でスリップでもすれば一気に何
百木も飛ばされな事だらう。再び尾根
に戻り、胸も雪被をコントローラー・アス
で登ると大きくな雪花が張り出していま
る。

一気にこの個所を越えようと、冷たい
空風で眼鏡が曇つて急に何も見えなくなつた。ようやく待望のオキの耳に出
た事を知る。こゝから今迄の無風がう
その様な強風に逆い下りトレールを進
つて山腹を行くと、霧の中から小屋の
輪廊がボーッと浮び上つて来た。

今日は東芝との相宿である。小屋
の階下は雪が吹き溜つて使用出来な
い。不安定な様子を伝つて二階に上
る。東芝の一人がこの様子を評して
言つたつて、「こいつは今日一番の
悪場だぜ！」

雪の夜は長い。持つて来たメタと
使つてコタツを作つて暖をとる。ツ
エルトにもぐり込んだ東芝組は先程
から合唱を繰り返し、大もこれに和
して小屋の中は暖かである。絶え間
なく吹きつける強風を身にしきがら
も、登攀を終つた今は、何か暖かい
ものが胸の中で何時までも灯り続け
ていた。

朝である。宿喫らず吹き付ける強
風の中を、東芝のサポート隊がセハ
人、賑やかに繰り込んで来た。而相
伴にあづかつて、久しぶりに暖かい
紅茶を沸騰走になる。

九時過ぎコテ／＼に凍つた靴を履
いて小屋を出る。濃霧で視界は効か

ないが、終始アンザイレンして登り続けた昨日から較べれば、うその様な楽しい下りである。

ハコトスタイル

オ一曰 一の沢出合(セ・ロ)くシンセ

ンのコル(カ・モー・ト・ヒ)く肩の小登(ヨ・ミヤ)

オニ日 肩の小登(ヨ・ミヤ)く土合(ナ・

ヨ)

ヘ後記

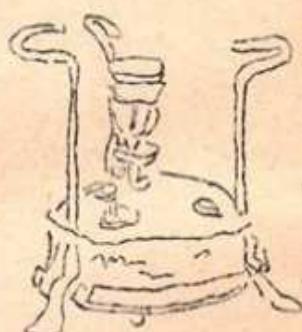
積雪期の一の名にあつて、古くから登られている衆も否易なルートがあり、この一の沢—東尾根である。このルートで問題になるのは、やはりユルから不吉の耳に至る東尾根の登攀で、これは積雪期の登攀を志す者にとって手頃な、秀れたゲレンデである。条件さえ良ければ、一日で踏破することは無理ではないが、あくまでも慎重に、ビバーグの用意は欠せない。

谷川岳東面合宿

Mem

高倉良輔

レ村田俊満、篠原健二、



期日 五月三日く五日

Mem

レ辻勝、深崎、近藤、山崎
、電江、村田、楠山、高倉
、篠原、中川、小林、長井

行動記録

オ一曰(五月三日) 雪上訓練及び岩登

り練習(一の倉沢)

オニ日(四日) 一の倉開拓(レ・村田)

一の倉一の沢(レ・辻)

オニ日(五日) 雪上訓練(マナガ沢)

一の倉 南稜

高倉 良輔

期日 五月四日

の中を今日のルート南稜を見て、鳥帽テスラブ下部へと急ぐ。相變らずな一の倉の険峻な岩壁に感歎されながら、今日の無事と祈り合う。

左から入る一の沢を過ぎ、鳥帽子ラブ取付矢につく。ここで革鞋に履きかけ慎重な登行を開始する。我々より約一時間先を一パーティが登つて行く。下おり本谷には雪上訓練の達中が、相当数上下している。南稜テラスで語道真と交換し、前方の景観に目を見はり、愈々南稜に入るべき腰を上げる。南稜テラスは背面上のびる岩壁に取り付き、ワンピ

ツチ程で小さなテラスに乗れる。

これからテラス左のフランクを乗り越し、小さなギヤソップに立ち、南後最難所フエイス下部に取り組む。この辺は、既に高度感が有り頭脳を刺激し、足を運んでやる。トップの村田君、慎重に右ヘトラバース・ピンを一本打ち左頭上に消えゆく。この後すぐ我々も飛き、このフエイス通過に約三十分掛す。

ここで南後よりヘルンゼよりに入り、リッヂに沿つて、ヘルンゼ右股二段、ムニー下部に着く。ムニーでは先程スラブを登つていた。パーティが苦戦しているのが見られ、落石の危険があるため、我々は左岩下に避難し、三分休憩する。

やがて前のパーティが無事ムニーを通過。後をすぐ我々が続く。始めはバツフ・アンド・フートで、上部はバソ? アンドニーで登り上段へ進む。上段は白雲へ連れ草付へ出る。ここで南に鳥鳴う岩、宋に名ルンゼ、湧沢下部、眼下に一の倉平谷と自然の美に感歎する。

一の倉岳へと急ぐ。先程迄の緊張感から解かれ、のんびりした気分で平凡な健走路をたどりベースキャンプに戻る。この後すぐ我々も飛き、

ヘコースタイム

B.C.(六.三.)～一の倉出合(六.三.)～南後テラス(八.三五)～一の倉岳(十三.三.)～B.C.(十六.四.)

一の倉一の沢

長井宏子

期日

五月四日

M.C.M
山辺、猿崎、毫江、柳山、
中川、小林、長井、

武能岳がくつきと見え、良いお天氣だ。我々セルブストザイルを付け八時、テントを出発した。湯ヶ曾川を出合に着く。ここで水を飲んで、一泊の雪渓の登りになる。すぐ左へ折り返す。右側をよくことにしてを湯を休み。右側をよくことにしてを湯を休み。雪面にビックルを突き刺すと、すぐぼくシマフトが埋つてしまう所もある。確保しながら次々と登る。左側を下つて来た人が「一時同様にこゝを通つた時は、雪渓は切れていなかつたのです」と云つていて。ほんの少し前に切れたものらしい。

の邊だらうと語し合う。

いよいよ一の沢の登りにかかる。

雪がやわらかいのでトップの跡をそ

のまゝ登る。今朝やつて来た小林さんと私は昨日の基礎訓練を受けてい

ない。それでグリセードの練習が出来たうな場所を探しながら登るが、

下から見上げて適当と思われる場所も、上まで行つて見下すとなかく

傾斜が急で、初めての雪道には出来

さうにもない。下りはぶつつけ季節

になりそうだ。やがて沢が右にちよ

つと折れる。少し左に、沢の下方が

見えなくなる邊で雪渓が切れていた

。五六〇cmのシユルンドがありてい

ます。右側をよくことにしてを湯を休

み。雪面にビックルを突き刺すと、す

ぐぼくシマフトが埋つてしまう所も

ある。確保しながら次々と登る。左

側を下つて来た人が「一時同様に

こゝを通つた時は、雪渓は切れてい

なかつたのです」と云つていた。

ほんの少し前に切れたものらしい。

圓が出てきた。振り返ると白毛門山や清水峰の平坦な台地から、蓬峰への道が見しきつた。幽の沢の雪渓が光つていい。

シユルンドをまいてからアイゼンと例は、アンザイレンして登る。やはり雪はやわらかい。ユルはすぐそこを見えていながら、雪渓はなか／＼終わらなかつた。

正右近くユルに着く。ここで昼食をとり。約一時間の休憩の後、相当に時間ひとりどうなので全員スキの耳までの裏毛根子を定め、パティオを二つに分け、中川さん、小林さん、私の三人が、シンセン沢を下ることに決つた。マチガ沢でグリセードをやつしいう人達が小さく見えた。下りは最初にザイルを使用することにして、中川さんが始めに下りた。がスタンスが斐つかうじいらしく、さか／＼樂でさそつた。小林さん、私と下りる。など早くザイルを付けると勇気が出て来る。二人で六分時間とつてし

まつた上、その次モザイル蒸しでは下れそうにもない。そこで、オキの耳で待つていくれる南穂バーティには申し訳ないけれど、全員シンセン沢を下ることになつてしまつた。遅くに一月に登つた上川武尊山が見える。二回目もザイルに頼り、され程苦労しないで下れる。ラストの辻さんは、ザイルを下り下り。下りたらまた、すぐ松達の確保だ。遙にしがみついて、自分の下りる音を待つていううちに、段々恐ろしいという気持ちが、強くなつて来る。下と見るとシンセンの雪渓の下方にマチガ沢が広がつている。三度目は草付きた。一番足湯が寒かつた様な気がした。やつと雪渓が近くなつた。

雪の上に足を下したが、グリセードが出来ない私達は、急斜面を一歩／＼下つた。マチガ沢に入ると、傾斜は緩やかに乍ら、振り返つて頂上を仰いだ。8字の辺りではスキーを楽しんでいた人も多かつた。テントに着いたら南穂バーティの人達が、夕食の仕たく

を始めてくれた。

ヘニースターム

／＼一つ名出合（ハ・四。）／＼シ
ンセンのコル（ナニ・ロ・ト・一・ヲ・ラ・ン
／＼マチガ沢（四・ニ・〇）／＼ベー
スマランプ（五・一・〇）



— 谷川岳の春 —

辻 勝 四 郎



あたりの樹々の緑が目に沁かる頃になると、酷い冬山の生活ももう思い出のページに書き入れられて、道具が戸棚の奥に投げ込まれる様に、それが心の片隅に追いやられてしまうと、かわりに春山が大手を張つてやつて来る。そしてそんな頃になると、僕はあるの室と岩と、そして緑の対比もあざやかな谷川岳の春を思い浮かべるのである。

止血などころ僕は長い間谷川岳の春の素晴らしさに気が付かなかつた。この山に初めて接した頃からその岩壁にひかれて、たゞ一途に名を登る爲に通じ続けていた僕には、新緑や、紅葉な

どの四季折々に移りしていくこの山の廻物に、胸心を寄せる程の余裕を持ち合へていなかつた。そして暗いこの山のもつ非情さと拓び付く教知れない遭難碑や、冬枯れの荒涼落寞とした湯檜曽川畔の光景などが、長い間谷川の印象として残つていた。僕が谷川岳の春の美しさに眼を覺張つたのは、不本意ながら自分の

けで一未だ良かつたなどという新たな感激が甦つて来た。
マケガ沢出合の喧騒を避けた我々は、思い出懐しい湯檜曽川畔にテントを張つた・汗ばんだ肌と川風になぶらせ乍ら、河原に腰を下して眺める堅実岩のあたりが又一段と豪情らしかつた。「暑い！」と叫い乍らSやDが河原で裸になり始めた。そんな彼等の姿を見ていると、もう何年も前の初めて春の谷川岳に遊んだ日のことが思い出されて、僕は思わず一人でニヤニヤと笑い出してしまつた、

その晩の谷川岳は、夏にはもう結構暑かいを至していたが、残雪の時期に登る人は未だ少なかつた。その日も日曜日だつたが、土合に降りたのは一の倉を登るという一パーティとマチグサを登る二人連れと僕の他には誰も居なかつた。

西黒尾根にも相当な雪田が残つて

いて、靴下足袋に旧式のピツケルとい
う僕は、尾根の途中でツルくと何回
も滑りては立つた。トマの身直下の雪
を回避して、かきつてマチガ次の壁を
所に入り込んで軒を凌ぐなら、それで
もようやく頂上にはい上つて見ると、
壁には珍らしい雲一つない澄んだ青空
の裏には、北アルプスの雪をまとつた
連山までがはっきりと浮かんで見えた。
雪のないところではもう高山植物
が咲いていた。人フテ一人立つ
て知らない静まり返った山腹に居た。ま
れなくて、僕はそくと風景を下つ
た。雪のないところではもう高山植物
が咲いていた。人フテ一人立つ
て知らない静まり返った山腹に居た。ま
れなくて、僕はそくと風景を下つ
た。

さつさとそこから逃げ出しました。
その日、西黒尾根で受けた小さな
落葉を、大切に空缶に入れて持ち帰つ
た。それが鉢に植えられ、可憐な花が
咲き、散々、そして葉が枯れてやがて、
鉢から捨てられる頃、長い梅雨が終つ
て夏が来ていた。
それは全てが幼稚で、そして英情だ
つた頃の思い出である。

昔の山は、全てのものが生きと明る
く、そして炎やかである。だが一方で
はその自然に入間が介入して、悲い跡
けない悲しい思い出を残していく。

春も遅い六月、我々は一の谷でさび
しい現象を目撲した。ルンゼに墜たわ
る二つの巣床、それが何と驚愕を衝か
なつて、素裸で水を浴び裸と服を脱い
だ。そして何気なく対岸に眼をやつた
時、二人の乙女が岩陰からじつと僕の
うをみつめて紅白服にびつかつて、僕
はお汗で脱いだ下着を身に付けると、
バツリ電車に埋だけブル／＼と流すと

虚無感が抗し切れない重みとなつて
心の中にのしかつて来た……。

その翌日好天でありますから予定の
三里を中止した自分達は、旧道の森
のトンネルの下を歩いていた。茂林
ではシマフナザの花が印象に残つた
が、元を付けてみろとこの山の花には
は実に花が多かつた。山桜、ツツジ
、藤、コブシ、その他石も知らぬ所で
な花が、森の緑の中に、雪の消えた
沢辺の下生えの向た、奥々と華やか
な色澤を復していた。

手引うれて路傍に捨てられた小さな
鳥の向跡とは何氣なくやり過ごす大人
なものにも、今日の自分には何か深い暗不
が感じられて来る。

五月には我物騒ぐ鳴き続けていた鳩の
声は今はもう聞かれない。緑の影と若葉、
人の往還のない旧道に、坤の鳴き声だけが
炎やかに音をついた。その木々の緑が色を
増して、坤の声が一段とくましくなれば、
岩川音はもう夏である。

木曾御岳

—全日本登山大会参加記録—



柿沼博

学校で行なわれた歓迎会の正調木曾節の踊りは、本曾の芝分を味わってくれて樂しかつた。

さすがは信仰の山だけめつて、中広い登山道の山側には、大

小数多くの石碑

が林立している。

要は白袋木の善男善女でござ縣う事であろう。しかし御岳山はいま晝の眼から覺めたばかりで、茶音も舌の音を閉ざして人影もない。やがて清涼の上の広々とした高原に大きな曲轍を描いて、行手の樹林帯の中に消えている。新芽をふいた落葉松が柔かな春の日さしに朝顔色に彩られ、やがて残雪におよわれた純白の山腹が、姿を見せはじめた。樹林帯に入ると登山路は勾配を増し、視界もさかくなるが、一六四八メートルの黒石小屋附近は瑞々しく切り開かれていて、ふき返りと附

ア、中アの山々が展望され残雪が美しい。更に落葉松と桧の樹林の中を

あつたように、先頭と最後尾の大会役員の赤旗の間で、各パーティ毎の自王登山ということになる。これは今年はじめて採用した方法だそうである。

御岳山の裾野は実に広大だ。見渡

す限りの高原状の台地は幾度かの噴

火によつて押し流された溶岩で形成

されたものであろう。そして山頂附近の噴火口には、大小いくつかの池が水を湛えて、美しさを併えているはずだ。坦々とした中広い登山道は、この高原に大きな曲轍を描いて、行手の樹林帯の中に消えている。新芽をふいた落葉松が柔かな春の日さしに朝顔色に彩られ、やがて残雪におよわれた純白の山腹が、姿を見せはじめた。樹林帯に入ると登山路は勾配を増し、視界もさかくなるが、一六四八メートルの黒石小屋附近は瑞々しく切り開かれていて、ふき返りと附

ア、中アの山々が展望され残雪が美しい。更に落葉松と桧の樹林の中を

昨日は名古屋で開会式、木曾福島に着いて入山式、そして今日は約二時間バスにゆられて、この山奥の王滝村に来てまでも、小さな小学校の庭で入科式なるそのがあり、村会議長さんの歓迎の時があつた。どうも山男達には式といふものは苦手らしく、御岳登山道を登りはじめて、やつと山登りに未だという気分になつた。

こゝからは昨夜リーダー会で説明が

越り中ノ小屋で休憩、こゝで泊る小屋泊ク班と別れて我々天幕班は田ノ原に向う。この附近より残雪が現れ、次第に雪量を増し踏からざると膝まで没する程となる。三笠山を左手に置いて樹林帯を登りきり田ノ原に飛び出す。眼前に広大な雪原と雄大な脚岳山頂が展開された。各パーティがこの光景に大喜びで、早速天幕を設営する。白色の雪原に黄、緑等の色とりどくの天幕が、花が咲いたように美しく張られて行く。我々は慶天の悲しさ、風雪を避けた木陰をみつけて張った。雪で埋れた小屋の屋根の上では、特別参加の自衛隊の無線通信班が、下との連絡に活躍している。夕日がしばらく山頂の雪をうすいバラ色に照らした後はガスが出て来て次第に視界を消して行つた。どうも天気は下り坂のようだ。夜は早くとシユラーフにそぐり込んでしまつた。

四時起床、昨晩の飯を暖め、スープとタイ味噌で朝食、リソゴでビタミンの補給をして天幕を撤収、六時出発。その時小屋泊ク班の先頭が登つて来た。昨日の予想通り天候は良くなさそうだが、今日一日何とかもつだろう。解は雪がしまつていて歩き良い。七合目で休み、小屋班を先に出る。休むと寒い。時々ガスの晴れ間から南ア、中アの連峰が望まれる。不曾駒ヶ岳がすぐ近くに見え、いつか登らねばならぬと思う。

八合目附近より傾斜が急にならぶが、ピッケルが必要という程のこともない。王滝口頂上には石垣に囲まれた神社があり、中は雪が一ぱいにつまつていた。丁度グスが切れで薄日がもれ、而ぬ展望高峰の剣ヶ峰が姿を現わした。美しい山だ。繼母岳に続く尾根は、地獄谷に向つて大きな雪花が山未でいて素晴しい。アイゼンをつけて剣ヶ峰に向つて来るのに会い、お互に元気な笑顔が出来ていて、この雪が雪崩れたら何千トンという雪の量で、さぞ壮观であろうと思つた。

剣ヶ峰頂上には開山の像らしき銅像や石碑、お宮等が半分雪に埋れて立つてゐるを見て、誰かこの山はゼニコのかゝつていゝ山だと感心していた。こゝでパン、ジユース、チーズ等でうまい昼食をとる。その中に黒沢口班が登つて来て、王滝班と互に握手を交している。ほゝえましい光景が展開され、山頂は一段と晴やかとなり、いかにも全日本登山大会らしい雰囲気がかもし出されてゐた。乗鞍モグスの切れ間に美しい姿を現して、歓迎してくれた。眼下の一の池、二の池は静かに雪に埋れて、春眠をむさぼつてゐるようである。

こゝより二の池に下り厚利支天に登る途中、開田口班の松山ダーゼルと草加ケルンのパーティが剣ヶ峰に向つて来るので会い、お互に元気な笑顔が出来ていて、この雪が雪崩れたら何千トンという雪の量で、さぞ壮观であろうと思つた。

摩利支天より雪に埋れた五の池に下ると、こゝが天幕班の今日の野営

地で、すでに開田口班の天幕が色々と
ぐくに雪上に張られてあつた。昨日の
田ノ原のように不謐がないので、冬天
パーティには云々として気持が良いが
、我々夏天組には甚だ都合が悪い。そ
してシヤベルを借りて雪を五〇釐位掘
り下げる、開きにプロツクを一米位の高
さに積んで、一汗かいて天幕を張り、
まあ大丈夫ということにした。所
がその反は惨たるものであった。
夕方から吹き出した風は次第に強まり
、天幕は激しくたゝかれ、おまけに気
温が冰点下に下らぬので雪のプロツク
は次第に溶けてきて、風圧に堪えられ
なくなつて天幕に崩れ落ちる。天幕の
張り継ぎは切れるでついにたまにかねて
外に出てみるといふと、身体もろん吹き飛ば
である。かくて我々三名は熊廻の深
夜に天幕を撤収し、松山デーゼルご草
加ケルソの冬木に逃げ込むこととなつ
た。がこの夜は冬木といふとも大變だ

つた。風圧で雨は浸入し床に漫水にな
つてシユラーフはグショ濡れ、天幕は
激風にたゞかれ、とても寝られたもの
ではない。

夜が明けても尚風雨は弱まらず、朝
食もそこくに強風雨下スプロスラーフとな
つて天幕を掠殺し、出発となつたので
ある。急の為にアイゼンをぬけ、吹き
上げの風に向つて駆き立つて下る。八合

目附近の樹林帯に入ると、風はうその
よう静まり雨も小雨程度となつた。
湯河温泉の小屋に着いて熱いお茶を而
馳走になつて、やつと人心地がついた
。こゝからは雪もなく兵衛谷を渡り美
しい不苦の松の森林の中を五時間歩き、
心行くまで再休憩を鑑賞しながら正
に入山式に武田久吉氏の云われた「近
頃電報配達のよう山を駆け上つて駆
け下りる人があるが、山を十分達成し
て要いたい」という言葉を実行したわ
けである。

倉平よりバスで湯河温泉に着き、
ドロンコの山男達がドヤ〜と荷物に

入り込んだのには、さすがの宿屋の
女中さん達も一寸もであまし気味だ
ったようだ。が、親切に迎えてくれた
。大洞谷に面した温泉につかつた時
は、本当に生き送つたような心地良
いを覚えた。その夜村人達の好意に
よる歓迎会で見せててくれた、この地
法流の御子爵は實に豪華うしいもの
であつた。

最終日は皮肉な事に工天氣だ。バ
スで小坂町に向う。町中皆選をして
開会式場の小学校マ庭に到着したら
、小学生が握手の歓迎をしてくれて
嬉しかつた。開会式後解散。

八月廿五日山野音楽大会記録

廿四(音楽会)開会式音楽合奏(音楽会)日本管弦樂團

小学校(音楽)

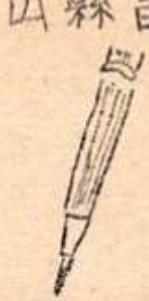
オヨモギ 小学校(音楽)音楽合奏(音楽)

ヨリモモ(音楽)音楽合奏(音楽)

音楽(音楽)音楽合奏(音楽)

山曾駒ケ木

昌彦



春の晩

閉日

五月三十日く六月一日

M元

柳沼博、山縣昌彦

才一日(五月三十日)晴後曇夜雨

伊那中のはすれにあら柳沼氏の知人
を二夜を明かした我々は、翌朝凌晨
の中に白く輝く中ア、南アの山なみを
見前にして、一様に驚嘆の叫びをあけ
た。土地の人の話では今年は例年にな
く雪が多く、千疊敷カールの小屋は雪
で潰れてしまつたとのことで、もう雪
も大したことなかろうと、たかとく
つた名文句である。両毛体の名コンビ
、ゆつくりとしたペースで高慶を移ぐ
べくわれたわけである。

春穂駅からバスで谷の口の
発電所に浮き立つたのは我
マだけ。初夏の日射しがジ
リ／＼と照りつける。我々
のとる中御所道は太田切川
に沿つてカールに直接突き
上げるルートである。山は
そんなに大きくはないが、
一日で二千メートルの高差差を移
がねばならず、かなり辛い。太田切川
に沿つた立派な道と、汗じつしよりに
なつて一筋周半も遡ると、コンクリー
ト建物のある水造取入口に着く。建物
の脇を通り抜けて河原へ一度下り、い
よ／＼山径となる。

こゝ暫く重い荷を担いでいかつた
せいがザックが肩にこたえ、樹林帯の
ジアザブの登りはきつい。「行こが良
く雪が多く、千疊敷カールの小屋は雪
で潰れてしまつたとのことで、もう雪
も大したことなかろうと、たかとく
つた名文句である。両毛体の名コンビ
、ゆつくりとしたペースで高慶を移ぐ
べくわれたわけである。

現われ、雪が消えたばかりの解りに
くい径は間もなく雪に埋もれ、後は
僅かに残る踏跡を辿つて遠山に雪を
踏んで登る。表面のくさつた雪はく
るぶし伍三でもぐる。沢筋を登り切
るとバツと前が広げ、宝劍の轟尾根
が長い影を落す千疊敷の雪原に看く
。眼前には前岳から宝劍への壁が屏
風のテラハ室のかールをとり巻き、
ふり返れば伊那盆地が遙か彼方に薄
緑色に霞み、その向うには南アの山
なみが雲に包まれている。さつき透
つたぬの指導標につこよりは天國
に入る」とみつたが、なかなかよい
所である。だ、広い雪原に生きるもの
は我々二人だけ。既に曰は宝劍の後
低くに没していま。千疊敷ホテルを
探すと左手に完全に潰された残骸が
見つかつた。潰れた屋根の下にオカ
ンとした跡もある。こそぞ泊ろうか
とも思つたが一寸り高いので宮田小
屋まで行くことにする。

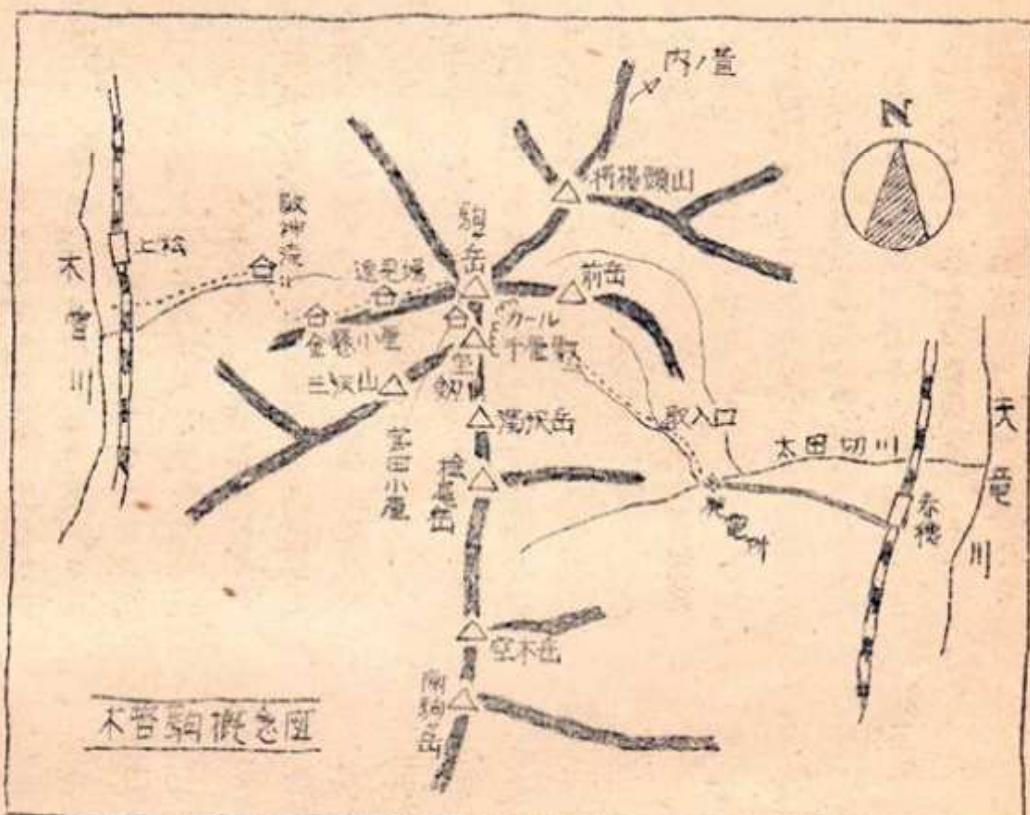
カールの壁から見るとかなり急で

心配された雪渓もとり付いてしまえばそれ程でなく、キップステップで登り切り、移鞍へ飛び出す。半分以上雪に埋もれた吉田小屋は、一段足の所であった。小屋の中もうす高く堅雪で埋まり、腰をかざめないと通れない。大学三らしいニパーティが既に入っていた一方は此處で合宿をしていきらしい。泳った雪とピッケルで積みならして何とか寝床を作る。

禮堂は小屋の近くで一本木・梵天牛。日没の頃、西の方の雲が切れて、赤雲の脇に紅い夕陽の光も美しい光景が見られたが、夜になつて、パラパラと雪が降り出して来た。

後六時〇〇、夜〇〇位。

示標	7.41
菅の台	8.10 25m
菅林運小屋	9.20
↓	
水道取入口	9.40
↓	
(昼食 0.40)	
↓	
日暮湯	12.00
↓	
千疊敷	16.00
↓	
宝駒吉田小屋	17.00



才二日（六月一日）曇後雨
最初の予定では此處で二人は別れ、
柳沼さんは将棲駒山から内の室へ下り
私は駒ヶ岳を往復してから空不戸へ

さて小屋から三十分たら
すで不戸駒ヶ岳の廻工。云
々に囲まれて祠一駒ヶ岳神
社一がある。のっぺりと雪に覆われ
たこの廻上で、後は下るだけだと冬
に包まれていたとはいえ、何の疑も

向うつもりであったが、今
期はひといガスで、暫く待
つてみたが良くなる見込み
はなく、止むを得ず私を一
晩に内の室へ下ることにする。
昨日は私が夕飯の後、寝
をしている間に、仲達さん
が宝駒へ行つて来たので、
今朝は私が宝駒を往復する。
麻袋の雨は雪になつたら
しく、薄く新雪の積つた枝
を擎じて宝駒の廻上に立つ。
壊れかけた小さな祠が霧
に帰れており、ガスの展望
は全くさかないのは當然で
ある。

なくそのまま向うへ崖根筋を下つて行つた。間もなくまだトタンの新しい小屋が現れた。シーザンともなれば軽く立つる山だから、どんどん新しい小屋が建つんだなあと跡しながら更に下ると、石下の一寸した雪原に崖根だけ出した小屋が又、出て来た。此処らに遭った小屋がある筈だが、あたりを探したが、何とか上人の碑はいくつもあつが、遠離離らしいものは見当らない。この小屋も多分最近出来たんだろう、碑は雪の下だろうということにして更に下る。同じ小屋は雪のかなり急な山腰とトラバースして右に捲いている。

僕は通過して、やゝ切れて来たガスの合同から前方の尾根を覗き見て、始めて径がおかしいと気付いた。然しこれをどう間違えたかわからぬ。とにかくこれだけ立派な小屋だから伊那の何處かに出るんだろうと一どもこのコンビニを含めすぎみうだーーに行くと、大きな石碑がいくつも立つた地図に着く。丁度登つて来た一人の登山者があり上松からのバスの終点

の登山者に逢い、聞いてみて驚いた。何とこれは不當への路である。不當、一寸でも疑つてみれば上の小屋は福島小屋、次は玉ノ庭小屋、先程捲いたのは木曾剣の前岳と竟行くところだが、二人共まさか伊那と反対の不當側へ下つているとは思いもよらなかつたのだけである。ガスと雪のためとは言え、山を甘く見たための失敗である。こんな失敗は初めてあるが、よい経験になつた。

そうとわかれば不當谷へ下るのも一興と下り続ける。遠見場小屋を過ぎ、暫らく樹林帯を急降下ると敬神金懸小屋である。丁度雨が降り出して来たので小屋に入り登食。無人であるが荷物に整理されており、感じが良い。

雨の小止みを見計らつて、下りきると駿河淀の小屋に着く。前に流れるのは木曾川に注ぐ滑川である。川を渡り少しく行くと、中古の自動車路へ出る。一軒の家があり上松からのバスの終点になつてゐるが、今日はもうバスはないとのこと。雨の中を歩く。左手に寝覚ノ床への径が分れてゐる。どうせ不當へ来たのだからと見守するに沿つて、この奇覇な二人を不當から運び出してくれた。

起 ^ル	4.00
宝鏡 ^岳 往復	
宮西小屋	7.40
↓	
駒ヶ岳 ^鹿 上	8.10
↓	8.30
遠見場小屋の上	10.00
↓	
金懸小屋	12.00
↓	~13.15
敬神淀小屋	14.00
↓	
寝覚の床	15.45
↓	16.00
上松駅	16.05

ゼルンラン・B・沢倉の一

則 良 藤 斧



パティは二つに編成された。一つは辻さん、布沼さん、藤原君の鳥居子奥壁パーティ、他の一つは柴漁君、齊藤のB・ルンゼか五郎ソゼのパーティである。

空機様の状態はどうでもいい。口ツククラインムをする上では最高のコンディションと云い切れんだろう。暑くなく寒くなく、出合を見た一の岩壁は、その全姿を後悔遙覗せてくれて有難かった。

例年より少し降雪に雪渓も大分小ささい。雪渓技術訓練をする男女の大バーティを横眼で見ながら、鳥居子スラブに取り付いた我々は、例によつて草鞋にはさかえた。いつもながらの快適なスラブの滑行。鳥居子奥壁の取り口きを過ぎ、一気に南斜テラスへ立つ。しかし結果的に奥壁パーティにどうしては、これが断念するや一条件になつてしまつた。何故なら奥壁から逆巻の殆ど垂直に断ち切れてると思える巻壁を、眼の当りに見てしまつたからであ

る。確かに上に又、下に見るのと違つて、俄からの巻壁はスッキリしている。いやスッキリと過ぎていむ。ことこの鳥居子奥壁においては、軽飛したらスラブから巻壁を通り、それの切れている所迄は、完全に確んで行つてしまつた。又、たまたまヘルメットの二人組が先行していたのも凶念する直接原因になつた

テラスの上で一時間歌モ、ザックを死に積になつて、鳥居子奥壁ヒニ人の走りを竟っていたが、見れば見る程ファイトが消えていつてしまつたので、奥壁は後日追オワツケになり、全員でニルンゼに入る事に決まる。本谷バンドは流石にまだ六月である。それいに雪渓を越けていた。その後をトラバースして、雪渓を避けニルンゼの基部に達する。が、取り付くは右手中央壁寄りのガリートルートを取つて、いふくニルンゼ逆行が始まること。

期日
M.元

六月七日

布沼 博、辻勝四郎、柴
漁悦男、條原健二、斧藤
良則

前日一日中の降雪だつたので今日も心配されたが、矢に相違して天気は良さそうだ。朝食もそろそろ七時、昨夜起きた布沼さん、柴漁君を入れ急勢立ち元気なマテガ沢出合天幕地を出発

今日の一の倉は日曜にしては、いやに静かだ。本谷（四ルンゼ）を境にして南面、北面に分けざならば、南面の方には殆んど我々を除いては居ないみたいだ。それが又、人工落石等の心配から我々を守ってくれて、充分的に非常に楽に、確りしているホールド、スタンスも手伝つてくれて高度を稼げるのが、なんとも嬉しい。

ガリ一から左にトラバースして、ルンゼに入つてからも、複数にピッチが上る。F2も簡単に越えた。しかし、それから元は嫌だった。人向の感じの予感というものは、往々にして当るものらしい。この時は、その事をつくづく感じたのである。勿論F3の手前で見たハンチング（帽子）やザックと、それ程気にしたわけではない——五月に起きた大山岳部のアクシデントで強された遠岳と思つていた——のだが、F3はヒツフスされニ、三木の所で切斷されていた、腐つてゐる赤いザイルを見た時は、變な胸騒ぎがしてなら

に静かだ。本谷（四ルンゼ）を境にして南面、北面に分けざならば、南面の方には殆んど我々を除いては居ないみたいだ。それが又、人工落石等の心配から我々を守ってくれて、充分的に非常に楽に、確りしているホールド、スタンスも手伝つてくれて高度を稼げるのが、なんとも嬉しい。

なかつた。小休止の後、誰とはなしに直登を避けた。これが結果的には、シヨツクの度合を最小限にしてくれたのである。左側を高巻き、F3上部へ降りようという地表で、先頭の藤原君から「何んだろう、あれは……」と声がかかるつて来た。反射的に彼の所へ急ぎ、彼の福さず先を見た時は一瞬ゾッとしました、マッケを着て仰けに倒れていた、それはまさかれない遺体であつた。それも一休ならず二体も、ザイルによつて結ばれていたのだから、寒隠、屋蓋してたらと考えると、苦筋に冷いものが走るのを、どうしようもなかつた。

遺体を回避してからの登攀は、今迄と違ひ慎重になつた。いや、少らざるを得なかつた。大分高く巻いてから、トラバース意味にルンゼに降りても良い気分はしない。これは後程述べまどつて離れなかつた。ルンゼ通しにくらくなつた。F3は、少々骨が折れる。が、岩が詰いでいるのは有難い。ちよつとしたテムニーも、ザックがつかえた位で軽なく通り越す。それから先も傾斜はそれ程きつくなり、淡々としており、草付きに入つてからも窓つて仄ほぼらくなつた所にチムニー状の滝があり、それを直登して越るに、そこはザ

ツテルであつた。待望の広河原も、すぐ床の下にあつた。

広河原は想像通りの何んや良い所だ。A、B、C各ルンゼの雪渓が融合して、沈没スラブへしぶきになつてある。左側を高巻き、F3上部へ降りようという地表で、先頭の藤原君から「何んだろう、あれは……」と声がかかるつて来た。反射的に彼の所へ急ぎ、彼の福さず先を見た時は一瞬ゾッとしました、マッケを着て仰けに倒れていた、それはまさかれない遺体であつた。それも一休ならず二体も、ザイルによつて結ばれていたのだから、寒隠、屋蓋してたらと考えると、苦筋に冷いものが走るのを、どうしようもなかつた。

一時間の休憩の後、Bルンゼへ入る予定が雪渓にルンゼが崖つている為、Dルンゼに取り付き、大きくなつてトラバースして、CルンゼからBルンゼに入る。雪渓を避けての登攀は、少々骨が折れる。が、岩が詰いでいるのは有難い。ちよつとしたテムニーも、ザックがつかえた位で軽なく通り越す。それから先も傾斜はそれ程きつくなり、淡々としており、草付きに入つてからも窓つて仄ほぼらくなつた所にチムニー状の滝があり、それを直登して越るに、そこはザ

もう一投足の距離にあつた。

稲荷へ出た途端、万太郎登から吹き上る風とガスに見まわれる。記念撮影の後、西黒尾根から飯剛新道を駆け下りた。

コースタイム	
テツ地発	7.00
南稜テラス	8.30
	9.50
広河原	12.30
(昼食)	13.30
稲荷	15.20



開始

鹿沼岩登練習

吉田泰彦



△期日△ 七月

△参加者△ は(勝)、柳沼、山縣、筒井、吉田、菅野、藤崎、近藤、岩井、

齊藤、猪山、藤原、小林、長井、

東武日光行の最終を榮福でつかまえるといふことで、八時半大宮に集合したが、これに接続の東北線が土曜運休というわけでまず一因巣。中には猪木から車をとはそそうといふ者の音も出だが、猪俣町木内の大さん丸人宅に急勢で一泊、翌朝7時発で新荒沼に出る。

ようやく晴け始めた町中を岩湯へはいり連中バケに取り付いている。水湯にて朝食の後、A巻にていよ／＼練習ツブのメンバーでエントリを行い、山

田、菅野の三名がそれ／＼トップを取り、次々にアンザイレンとして隔て並攀に入る。上に出るドリーダーに指示されて確保態勢をとる。この岩は内配は序々危たが、ホールド、スタッシュが大きいので充分的に樂である。全夏が土に暴晒すると、今度は豈つた処を適度下降する。初めての者もいて、一人／＼指示され乍ら下るので大助時間が掛る。次いでト

森、孫崎、青藤の三名が三ツ道具を
渡されてハーケンを打ち下ろす。十五人でザイル三本、しかも女性群
がスピーディなので時のたつも早い。再び全員が懸垂下降を終る頃には既に登。

木場の近くの木陰で昼飯、珍らしく西爪の配給もあり、なごやかに昼休みの合唱練習の後、一時午后的部に入る。

懸垂の仕上げの意味で女性部を対象にアッズザイレンガ一時あり、次いで確保練習。メーカー或いはニメーターとザイルを余してダイビングをやるのだから、確保着も楽でないがザイルにぶら下る音も大変である。一方ではザイルが肩まないかとザイルの心配をする者も出る。シヨックに耐え切れずにわずかにセルフブレインによって墜落を免がれた者は何人か出たが、シヨックの恐ろしさに改めて認識を深めたことゝ思ふ

最後に空中遭生を各人が一通り経験し、禮尚行のT、P、Yなどが吊上げの練習を行つて、午后四時この日のトレーニングを終つた。
トトロ——。

今回のトレーニングは今年では沓川に次いで二回目のことであり、初心者、経験者、折り交ぜての練習であつた。為、皆に満足のいく結果にはならなかつたが、初心者に岩に馴染ませるという美では成功だつたようだ。

今後はそれ／＼の夜壁に応じた粗分けによつて、もうと多彩な有効的な練習方法をこつていきたい。いずれにせよ、この種の練習山行はとつと数多く企画されて良いのではないだろうか。



◇ 夏季山行記録 ◇

駒ヶ岳から三伏峠へ

篠原 健二

南アルプス全山縦走

—駒ヶ岳～聖岳—

日) 8月1日～8月12日
ナンバー) 菅野直也・篠原健二



八月一日

齊藤さんの見送りを受けて新宿より
満員列車に乗り込む。蒸暑の車内に立
つこて二時間、大汗でやつと空いた席
にありていたと思つたら、回りの登山
者は皆おりててよつた。

蓮崎から駒ヶ岳神社へのバスには登
山者はだつた三名、夏も盛りと言うの
にこれはどうした事かと、始めての草
獨行ゆえにいらぬ事を心配する。しかし
神社に着くと窓の淀河原でかやく
やつていろ。やつと心の動搖も治まつ
た。神社の傍の小屋のオバサンに「桜
楽殿の下に寝かしてくれ」と頼むと
ニヤニヤして乍らも承知してくれた。

八月二日

神社(四〇)→笠ヶ平(六・二・五セ・ゼ・ゼ)→
五合目(十・四・五セ・ゼ・ゼ)→七丈(十二・ゼ)
薄暗いうちに吊橋を渡つて出発。可
成り急を走り、笠ヶ平を一しきり登ると、

峠の平に出る。こゝより往は極々急
になり、展望も効かず嫌なあきく
する登り。五合目から七丈小屋まで
は鎌あり梯子ありで、大きな荷に挟
られせう小屋に着いた時は、予想通り
パテている。

八月三日

七丈小屋(四・ゼ)→駒ヶ岳(六・ゼ)→小松峰
(七・ゼ・ゼ・ゼ)→仙水峠(九・ゼ)→北東小屋
(一・ゼ・ゼ・ゼ)→萩原(十四・ゼ)

昨日と同じような登りに、未だ日
も昇らぬうちに汗びつしよりになる
。頂上に立つと目の前に、仙夫、遠
く北岳の肩に燐光のふくえい山容が
のぞいている。余りの寒さに愈いで
摩利支天への下りにか、り、すれま
り右に山坡を横切リ小松峰の登りに
なる。こゝより一気に仙水峠。そし
て衛杵峠と北岳に下る。こゝに泊る
予定も二時間程の休憩でファイトも
出て、坂越まで歌ぐことにする。

八月四日

寝次(四十五)→仙丈岳(六・ゼ・ゼ・ゼ)→高望

沈(十三・三・一) — 雨保小屋(十四・四)

樂だと思つた馬鹿尾根も寝不足の為
か、意外に時間を使つ。仙夫からは登
山者も少くなり、やつと山に入つたこ
とを感じる。

小屋に入つて今回始めてクタ立に会
う。

八月五日

雨保小屋(四・四) — 北岳(十三・三・一) —

向ヶ岳(十四・三・一十五・〇) — 豊島岳(十六・〇)
北岳への登りは一番心配したが、連
日晴天で沢の水も少く、ツメの鞍滑
さもせず楽に頂上に立つ。始めての好
天の山頂に、荔く事のみで展望を樂し
む。予定の山県さんとの会見も果さず
北岳を後にする。向ヶ岳までは黙つた
よりも長い。しかし風もなく雲もな
いな」と思う。

向ヶ岳で始めて荒川、赤石と徐々山
々がかかるで見えた。今夜泊り場、

農鳥小屋の屋根が不ツンと光つて見え
る。今日も又嫁になつ下りを終る。

八月六日

農鳥小屋(四・四) — 豊島岳(五・四) — 四岳
(八・〇) — 鹿ヶ平(十一・〇)

朝のうち農鳥岳往復。かすんでいた
蘆見岳もぐつと近づき、北岳、南岳
が耳につになつてぞびえてくる。一つ
向う側の尾根には今日の宿泊地、熊の
平が芝を敷きつめた砂に緑色に光つて
いる。小屋に戻つてみるときのものと
出払つており、小屋のオヤジに此の平
まで六時半も見ておけば大丈夫といふ。
かこれてあわて、出来、向ヶ岳へり、
既に三峯へ。此處の展望は素晴らしい
て伊那大島に登る。大島よりバス
を満員、途中でバスがパンクして予
定通りモ一時回りく出で蘆見着。昨
年仲夏さんと汗を流して歩いた長い
道も今度はバスなのでごく楽だ。

八月七日

伊那大島(セ・〇) — 塩川(十・十) — 南次分岐奥
(十一・〇) — 三伏峰(十二・五)

新宿は朝すこい混雑で三等車き片
限にかうりじて坐り込せ、辰野巨圣
て伊那大島に登る。大島よりバス
を満員、途中でバスがパンクして予
定通りモ一時回りく出で蘆見着。昨
年仲夏さんと汗を流して歩いた長い
道も今度はバスなのでごく楽だ。
一人なりでヒツチが上り、二時前
に峰に着く。小屋には既に春麗君が
到着している。

三伏峰(十三・〇)

昨日三伏から遅く着いた連中に見合
はれて出発。今朝は何時になく荷を卸
子が良く蘆見へも何なく登る。しかし
三伏への下りは意外に長い。

三伏峰(十三・〇) — 高山裏霧宮代(十一・〇)
三伏峰四時三五分、三伏湖へ着

小屋の傍に一時間程寝ころんでいた
と、待つ遅しかつた菅野さんは空を
見えた。

三伏峰より聖岳へ

菅野 達也

をちに見送り、鳥居子岳への登りにかかる。小河内岳までは三伏岳の少しを後に見ながら稜線沿いに径が続くが、大日影山、板屋岳は樹林帯に径が入り前もさだかでない。

高山東裏宮地は荒川岳へ鞍部より三分程下ったところで一方が展けた気持ちの良い場所である。今日の予定は荒川小屋まであつたが、午前中の晴天も午后から急変する見通しがついたので、高山裏に泊ることにした。時参したパンチヨを利用し、本を坊つて小屋掛けをしてオカンの用意をする。午前中は雲一つない天気だったのが小屋掛けを終る頃には空一画に雲があり、雨が降り始めた。

夜はよしに赤穂宮林署の無人テントがあり、誰も宿をかつたので利用させてもらつた。

八月九日 停滞

昨夜から暴風雨になり停滯する。宮林署のテントは四基半位の広さがあり住心地が良い。福原君の寝床でスン

ホールを利用し、ショウダの駒を作りシヨウヤをして過す。

八月十日

高山東裏宮地(五四五)→前岳(八二五)→中岳

(九四)

→東岳(十・四)→荒川小屋(十一・五)

八月十一日

小河内より見た時は物凄く長い林に感ぜられた。壁よりも思つた程もなく前岳へと伸び出す。稜線は風が強く、富士山が意外に近く見える。

前岳より稜線をいに荒川小屋への分歧桌に出、荷物を置いて東岳へと向う。荒川小屋着十二時、昨日吉日六号が上空を通過したと聞いて驚く。

八月十一日

荒川小屋(五・四)→赤石亭(七・五)→八二五

一百両洞山の家(十・四)

荒川小屋を出るとすぐに大聖寺平ゆるい登りにかかる。大聖寺平は僧院と雪蹊を差しに接種を施さず晴らし、

の一言に盡る。大聖寺平から赤石への登りは傾度が最も狭い。そのつであつた。越々に雪蹊が残る山頂をかしを横

切る様に下るとすぐ百両平への登りに

かかる。百両平からは大聖寺への攀れ目掛けてぐんぐん下り、鞍部より次第に二十分も下ると百両洞山の家がある。

八月十二日

百両洞(七・四五)→東岳(五・十)→奥聖岳(十・五)→聖子(八・三)→西沢渡(十一・〇)

八月十三日

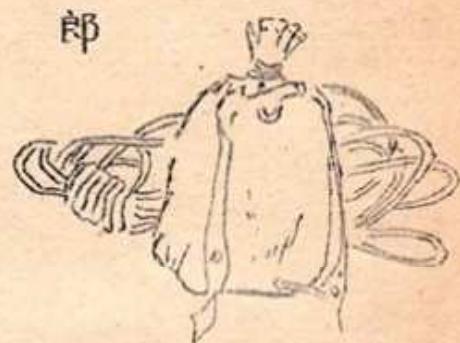
百両洞下り標中電灯の灯をたどりに一時向かって大聖岳の鞍部へ止る。天候は悪化のさを感じ、朝薄い風とかすた。前聖岳からは注意したつもりだが聖子へ進んでしまつた。三十分後やして戻り、前聖ありア聖ミ平へ下る。予定では覚岳進行行く口事をあつたが、食料が一日分しか余裕がなく、天候も悪くなるぶよみで残念だがこゝから西沢渡に下ることにする。

ぐんぐんとほす福原君に引き手られて下る。途中から雨が降り出で西沢渡で遅く最終の軌道に乗せてもらひ、井沢村へと歩く。

涸沢生活

滝谷才二尾根
滝谷クラック尾根

辻勝四郎



〔日〕八月九日（十六日）

〔日〕八月九日（十六日）

○概要○

夏歩き前にして今回の穩高行は一元

会山行の一環として計られ、少數乍ら

行動記録

八月九日 雨（廿五六日）

新宿（ハミ）→ 松本（十三五。）→ 四五。）

上高地（十八。）→ 明神館（十九。）

参加メンバーが決定すると、直ちにその計画に入った。穂高の岩場に馴染の薄い我々としては、ルートの案内に不安はあつたが、ルートは各自研究にまかせ、アツツケ本番ながら予定のあらルートをもうことで、実勤六日のうち当初に目論まれたルートは次の如くである。

① 滝谷才二尾根 ② 滝谷クラック

尾根 ③ 奥又白四

峯甲南ルート既松高

ルート ④ 屏風岩

カルンセ

ところが計画も達

み準備もいよいよ終

つて、ざ出発といふ

前日になつて、三名

のうち一名が参加不

能となり、しかも台

風六号装束とすることで困難を生じた

が、結局編成は柿沼、辻のペアで予定

よりも一日早く車を八日朝、雨の新宿

より後にして、

明神館に着いて梓川畔にテントを張

つた。

八月十日（晴）

明神（九。）→ 德次（十二。）→ 穂尾
（十二。）→ 十三。）→ 潤沢（十八。）

明神の岩峰が陽光に映えて河原の

朝は美やかである。三十分五度して

涸泡したカツクの底に靴下を出し忘

れて、又やりなをしと、う笑えぬ一

幕もあつて九時出発。

徳沢に着いて小憩、荷の重いことを理由に良く休み、昼すぎ横屋の河原に着いて裸になつて昼飯をとる。

こゝにテントを張つてゆろうとい

う説定もあつたが、ともかく頑張ろ

うと言うことで再び根の生えた木を

セックを抱き上げて出発。皆小舎さ

地直通のバスを使う。途中晴れ向を見て日焼け心掛ける良さを論じたが、上高地では穂高は見えずぬか雨。足を延せるところまで行こうと、直

ろに上高地を後にしたが、優に十賀

は過す皇荷に辻玉ホバテ、七時過ぎ

明神館に着いて梓川畔にテントを張

つた。

すぐるあたりで左手樹林の向より屏風岩が全貌を現わして来る。後日、登攀対象であるオーレンゼを偵察して見たが、今年は雪の消えるのが遅く、5字下部には断続的に雪渓が残っているので、登攀を断念する。

模擬合を離れて急坂を駆れば、やがて涸沢のカルカルが目に入つて来る。天幕設営の後、明日から岩との斗争を祝して、K、Iさん、手くしのサントリの栓を抜く。

「櫛高星夜」そんな素晴らしい夜である。

八月十一日（晴後曇、ガス多し）

凌谷オニ尾根 天幕（七・五）—北稜（八・三）

テント（十八・〇）

八月十二日（雨） 停滞

今日は休養を予定していたが、雨

はむしろ有難い。終日食つては駄弁り食つてはシラーフにもぐり込む。

八月十三日（雨、官員七号） 停滞

街の外二日目、今日がス深く屏風の

頭も姿を見せない。“煙も止まず”本は射た山まい」と言ふ乍らも、Kさんが日に二回の御用を果しに雨の中をとび出して、いつては外界の様子を知らせて呉れろ。

七月七号上陸し、夜半に入つて暴雨

雨になる。

八月十四日（雨） 停滞

台風一過を期待したが、今日も雨足がテントをたたく音に目がさめる。

凌谷オニ尾根

昨日の残雪は尽き、木近もホツカに、今日は一日休養と言ふ予定だったが朝起きてみると上天気。こう呑つて見るとやはりビーフとしてもいい天氣だ。朝飯も早々に天幕を出立。さすがに足は重く、南稜の途中で何回も足を止め、轟の中を何時までも尾

こうで浸水される。残された行動日はあと一日。雨空をうらめしく見上げながら「明日も雨が降りやがったら、俺はこゝで死をまくるをレヒケンダトモ」酒済入り四日目ヒュウ〜〜新宿出来なくなつて、所をまくりに出て、いつた。

八月十五日（晴、ガス多し）

クラック尾根

天幕（七・五）—北稜小屋（九・三・一・二）—

クラック尾根取付（十二・三）—旧メガネコル（十五・〇）—縦走路（十七・一）—天井寺（十九・〇）

八月十六日（晴） 下山

皮因にも今迄にない上天気。涸沢発九時。途中横尾の橋は台風で流出し、上高地からのバスも道路決壊で徒歩連絡。松本に出直す。今度は中央線不通という。意を決し、大枚はたいて名古屋回りを帰ること、例の如く市内（月色屋）で汗とあかを落し、飲んで食つて身も襟も軽くなつて車上のスとなる。

北穂のコルに出てオニ尾根に移る。記した眼で追つて、くと、隣りのオニ尾根上部に登攀する者の方を見える。彼等の落す落石の恐気味な金属的音音、湧き出した霧の中に見えかくれする今にも崩壊するかと思われる岩壁。滝谷のヤ一印象、それはまさしく「岩の墓場」である。

オ四尾根への下降路であるB沢左俣にも縦走路から落石が絶えなくて続く。こう出撃をくじかれてしまうと、今日のオ四尾根はどうしたものかと思案して子う。結局は「今日は調子も良くないから、一つ滝谷の恒河を越えてオニ尾根で遊んで帰ろう」という次オニ尾根である。

オ三尾根に女性を置いたペーテイが賤やかに取付き、ドームの正面のクラップにも元気の良い二人連れの姿が見える。オニ尾根は気軽な岩のアーモナード、リツナ通しにP5まで下り、のんびりと折り返す。

P2のオニ尾根側は下のB沢まで小気味良く切小落ち、急なオニ尾根の壁に向うには、ニホンオオツキヒスカイラインを描いてクラック尾根が急峻な壁、走のせかせていく。P1の登りはP2のスに走っているクラックがルート。今迄ノーサイルで来たが、こゝだけはサイルを伏し前の大テイの通過を待つてクラックをこぐり乍ら登る。見かけよりも悪く、残置ハイケンにビレーリテ四十メートルでP1の頭に出る。

帰りはコルに出て西側南斜面を下る。P1の底だけに一層岩は浮いて脆い。終始緊張しながら下ると、やがて小雨の後だけに一層岩は浮いて脆い。さす割れを下る地表で、左手にメガネの名残りである崩壊した岩塔が見えて来る。オールフレート側から落石の警戒し乍りなまき下ると、尾根が急に切小落ちた地表に出る。クラック尾根の取付處である。ルンセ内アンカイレンして、十二時半ペンドオトラベースで登攀を開始する。

「こんな涼しい日は滅多にないです」と北穂の小屋番が言う。森彈削からは絶えなくて霧が吹き上げて、その切れぐれに穂の穂先が浮き見せるが、台風はもうこの山麓にも秋を誇り込んだものか、手のしごれる程度の寒さ。「今日はクラックを登つて返す足でオ四尾根をやろう」と古川が最初の気勢もとがれて、暫らくは小屋に

来るむことである。

小屋から設定路を約十分、オール

クラードヒュコルからB沢を下る。

急傾斜のからしくしたルンセで、長

雨の後だけに一層岩は浮いて脆い。

終始緊張しながら下ると、やがて小

さす割れを下る地表で、左手にメガ

ネの名残りである崩壊した岩塔が見

えて来る。オールフレート側から落

石の警戒し乍りなまき下ると、尾

根が急に切小落ちた地表に出る。ク

ラック尾根の取付處である。ルンセ

内アンカイレンして、十二時半ペ

ンドオトラベースで登攀を開始する

。

腕の岩に恒河に足を運び乍ら、途中打致されていてハーテン直しサイル一杯うびる地表でKさん五確保する。サイルに引掛つた石が響き声を立てる。B沢に落ちていく。次の草付まじりの岩を登るセ、尾根上のテラスに立つ

オービツチ、リウニッタ容易な足を

く灰色に塗がつて、上部のルートの判断がつかなくなると、ハサ、か心細くなつて来る。こ、からB沢側のもう、岩場をトラバース気味に登ると、大きな傾斜のゆるいガレ場に出る。ガスの切小向からB沢のコルが見える。ほど等高線をとこうだ。

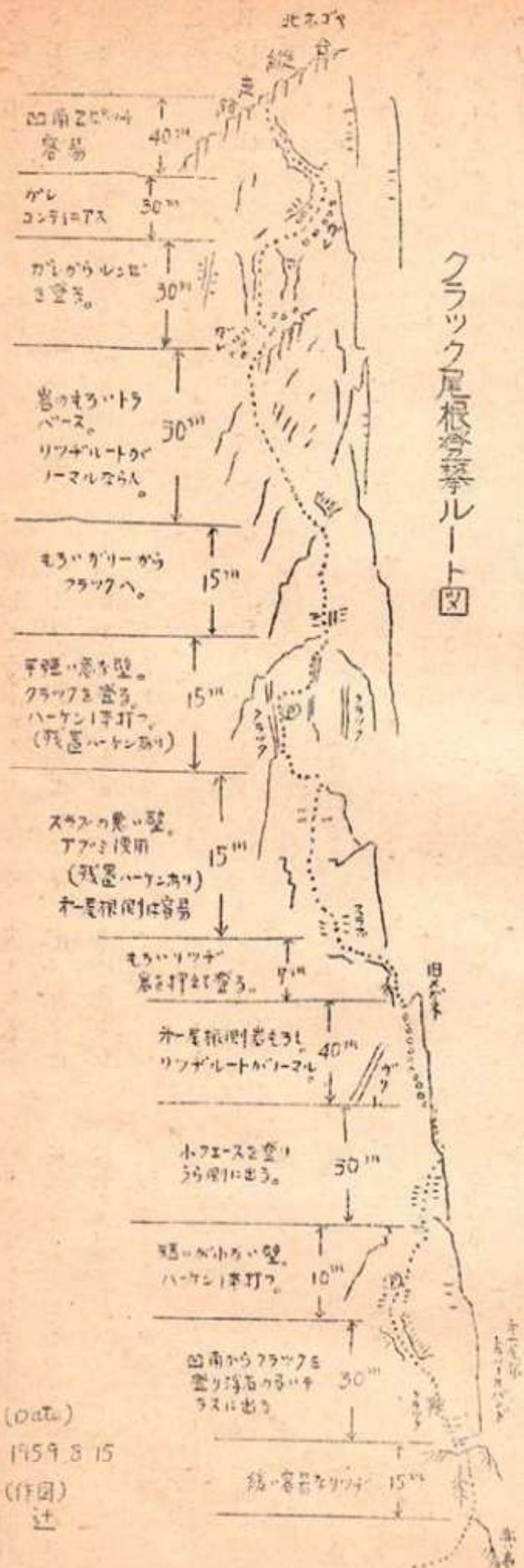
移動が並いと、いう守備感に励まされながら、ガレ場から正面の壁に取付き、上部でチムニーを登つて右手に回りこむと、再びガレ場に出て、こ、で頭

着きクラック尾根のリツダも姿を消す。

なきも左の岩壁の凹角ミシンピツナ、続いて左上にサイルを引すつて、ぐと、危に目の前に空間が広がつて、そこでクラック尾根は終つていた。

△附記△

オ一尾根と並んで渓谷の代表的な岩場と言われるクラック尾根は、どこから見ても急峻な立派な姿をもつているが、ハサ取り付けてみると、短い



(Date)

1959.8.15

(作図)

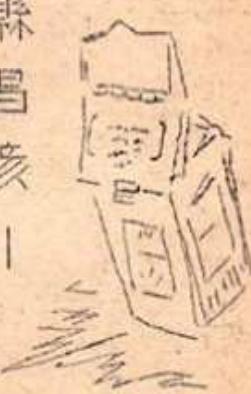
辻

ツチゴヒアンカーレツダをもつていて、見た目程には困難ではないが、ルートが複雑でありルートファインテシフの如何によつては、相当の苦斗を免れない。上半部に較べて下半部は岩がもうく、登はん面倒は少ないが、雨の為殆んど予定の行動をとれなかつた今回の大高行の空白を埋めきに足る。半庇とのある登はへき味うことが出来て幸いだつたと聞う。

荒川「北沢」より

北岳へ

山縣昌彦一



8/6 ～ 8/8

不安

荒川の渡渉の恐ろしさは、一昨年網沢に入った丁君に散々聞かされたもくだ。それにたま／＼このルートを紹介

沢の音

そうと進み出したが、二三歩で足が進まなくなる。サツクが重いと実際バランスが難しくなるものだ。観念して引返し、少し下手の平地で幕営と決める。

したある山岳雑誌にも、腰まで流れに瀕りアンハイレンして渡渉している写真があつて、大部難しいことが書いてあつたりした。天幕まで背負つての單獨行、不安を感じるのも無理はない。それにして中央線の車窓から下の渓谷を見下しては、今は減水しているなどか、あそこらなら渡れるかな等と考えている自分を見見て、我乍らあかしくなつたものだ。「流された時はすばやくサックをはずし……」試験

場に臨む生徒の脳裡に教科書の数行の吉句が去来するように、私の頭にモヤんな断片的なことが浮んだり消えたりして、いた。

荒川小屋の前の吊橋を渡り、騒々しい工事現場を通り抜けて荒川に入水は、荒川の轟々たる水音とは離れられないと運争となる。然しまだ新らしい吊橋や丸木橋が渡されていて案じていた渡渉はなく、右に左に荒川の流れを渡つて煙壇も過ぎ、やゝ物足りない思いで溯行を続ける。とは言つても煙壇あたりより先は殆んど河原歩きでこれといふ徑があるわけではなく、結構神経は次々に夕向に包まれ、それと共に沢の音はその強さを増すように覺じら

ヒト／＼行詰る。その先は深い淵を持ったえぐれた断崖となり、捲こうとしてもえらい急斜面のヤフで、強引に突破しようとしたが、崖の持にかなわず退却。壁のへすりもかなり悪く途中で引返す。残る今は対岸へ丘岸)に渡るしかないが、それには少し戻つて対岸まで届いている太い倒木の上を渡るか、灰いは渡渉するかである。白、泡を吐む急流を見ては渡渉は遠慮せざるを得ず、倒木の上をサーカスの綱渡りぶろしくそろ

かす、天気は快晴、まずは十分な火焚をして夕食をとる。深、谷向は次々に夕向に包まれ、それと共に沢の音はその強さを増すように覺じら

れる。火の粉を星空に舞いあける炎よ

、今更だけが秋か反である。

今這卓獨行は隨分経験しているが、

この時の夜程心細かつた事はない。轟

々という次音が高く強く反響を交えて

この真暗な小さなアルヤンテントの中

に渦巻き、流れが増水しているような

、天幕の上の山腹が岩雪崩でも起した

よを錯覚に襲われて目は冴えろばかり

耳を塞ぎ反転をくり返しつゝ、夜

中をすこてやつと眼りにつくことが出

束だ。

甲石原(八曲)→芦安(九曲)→十一曲まで徒歩

途中トラック便乗少警往山入口(十二曲)→藍川

小屋(十三曲)→煙窓(十六曲)→幕営

(十六曲) 天候(晴)

朝行

、やな一夜は明けた。今日は、よ、
よ北沢に入る日だと、念の鳥幕営地に
ケルンを積み名刺をはさんで出発。昨
日の倒木は慎重に荷物を二分し、二回
往復して対岸に渡る。今日は早晩複数
で調子がようと、兎にも角にも度波り

返して間もなく北沢出合に着く。これ

から木量は半分以下になる筈だと自

分に気安のを言い聞かせつ、北沢に入

るところがどうしてまたも、水は多

い。危かしい丸太を渡り、或いは渡涉

きを繰り返し、両岸迫る谷の溯行を続

ける。ホーロン沢出合を過ぎる頃から

は段々たる巨岩の堆積となり、間を縫

つたり、或はよちたりルートを迷状に

かなりくたびれる。荒川の谷は大き

。ナツクナ重いのはこたえる。人本造

沢出合を過ぎ、いよいよ頭の大きな塊よ

うやく北岳の稜線が遠く望まれるよう

になる。左岸の長、麻を高巻きをへと

へとになつてやつと通過すると、左手

かり滝沢が落ち込んでおり、汚れた雪

のアロツクが消え残つてゐる。ハフの

向にかがスが谷向を消し、やがて夕立

となる。急いで右岸の段丘状の小石の

堆積の上に天幕を張つてもぐり込む。

天幕を坦いでいる時は良いものであ

る。特に此の北岳など、他のルート
は吊尾根を除いて全て登りづくした
し、この暑いのに水もなく、吊尾根を
登るより、水もふんだんにあり、誰
も人に違ひなく荒川からのルートを
天幕を坦いでのくびり溯行するのが
一番だなと、移動が遅くなるに勝
手なことを考えるモカだ。

かなり寂しかった雨も六時頃には
止る。谷の下方のひらけた向うの雲
海の上に黒い富士が浮き上つて見え
幽玄の気に打れた。

今夜もまだ次音は大きいやが、昨夜
と逆の作戦でキャンプドームを灯して持
参の古新聞を片端から読もうとに向
もなく眠くなり、あつさりと寝入つ
てしまつた。

坐合(六曲)→北沢出合(七曲)→ホーロン

出合(八曲)→滝天出合(十五曲)→幕営

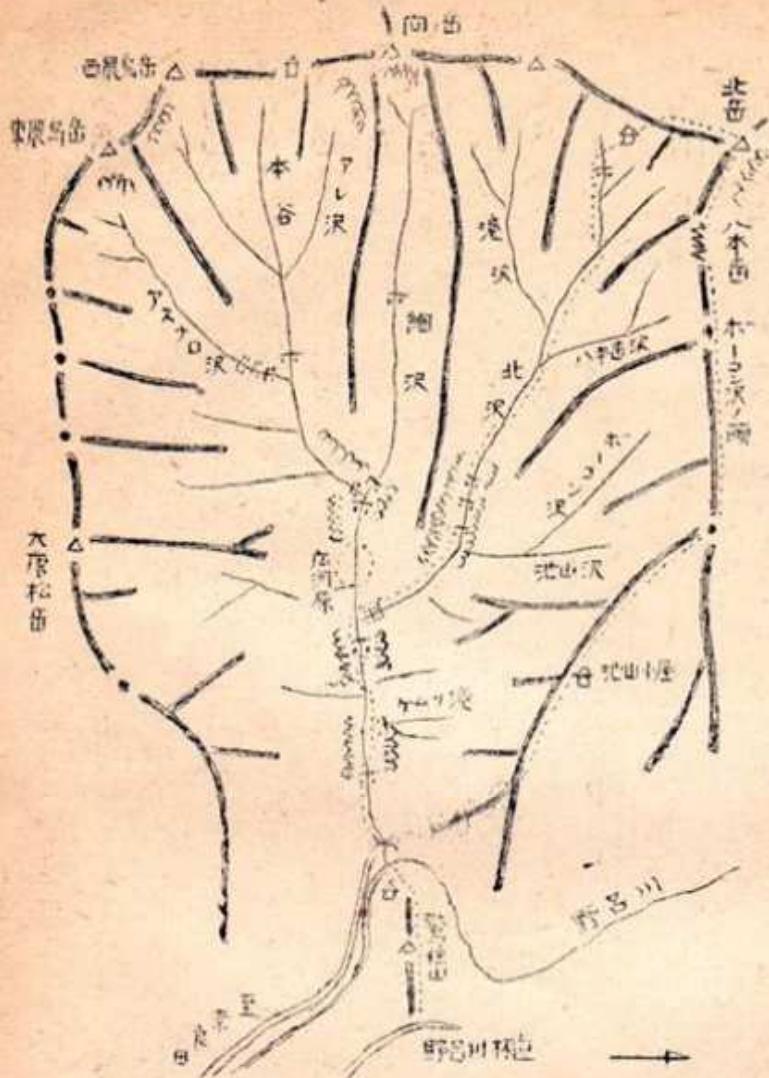
(十五曲) 天候(晴二時半頃より夕立)

朝焼け

朝の空は実に厭を変化を見せた。

未明のモ合雲、帶狀の巻積雲は紅色に朝焼けし、向もなく鱗狀の巻積雲となり、急いで出発する頃はペール状の巻層雲に日暉が現われるようになつた。

水量の減った流れを右に左に渡渉なくり返し、石の押し出しを喘登、大きくなり分する沢筋を左に入り、右に二本の小渓を入れる先で見当を付けて沢をは



荒川谷概念図

なれ、慎重にルートを選び乍ら杖をかき分けて登る。向もなくかすかな踏跡を見付け、遙ニ無二登れば案外簡単に北岳小屋の水場に出る。

北岳小屋には若い小屋番がたゞ一人携持ラジオを聞いていた。お茶を貰つて話をしたが、山小屋には古庵とまでいかなくともやはり少し違ひのある一

山と同化したようだ。主人が鉛豆煙管でもくわせていて欲しいものだと思ふ。近頃の称に十特に人の多い山では一旅館の客引のようを印半纏の若者が大きな顔をして金儲けに汲々としているのが多く、と言うのは、止むを得ぬ時勢とは言え非し、ことである。

小屋を出ると既に一面のガス、ほほほ、と雨が交つて来た。いさぎ良くな農場一大白沢を躊躇らめて吊尾根を下ることにする。稜線を吊尾根分歧点まで登り、空身で北岳山頂往復、始めて何人かの登山者に会う。視界零。かすと小雨に退われるよう吊尾根のカラカラした道を下る。八本歯を針金で掛けてあつたりして別に大したことなく通過、あとは緩、砂礫とハチ松の尾根、此處いらは晴れていいれば良いであろう。

本降りになつた雨の中を池山の温泉を通過、情け容赦もなく急降の続く最後の下りは、昨年の光岳からす

又川の下りを思へ出させられる。濡れ赤土に見事な瓦礫をつくこと数回、見る者の唇を單独行なのが幸いである。

荒川野呂川の合流点より工事場のトラックに便乗、奈良田造の野呂川右岸の崖縁の道をトラックは水沫を上げて突っ走った。

達天出合上部出発(六三)→二段(セ・・)→北岳小屋(八・五)→北岳(十・五)→吊尾木分岐(十四)→八本歯(十一)→辻山(十三)→荒川(十六)→西山温泉(七)

山々帰りに温泉に寄るのがいつしか私の習慣になってしまった。泥んこで濡れぬすみのせいか、最初に入つた宿には部屋が空いていないと言われ、家並木のはずれにあるわびしい一軒に泊ることになる。

夜と共に月雨は益々激しく、宿の裏を流れる早川の瀬音が凄しい。この宿の客は私一人、月日を湧かしてもらつ

て、温泉ではなかつた!したまつた塗を落す。部屋に床つて見ると数箇所から雨波りがしているのに驚いた。

翌朝もまた雨は激しく降り続き、早川は昨日とは打って變り真茶色の渦流が岩を砕け、一束もあろうかと思われる波をあげている桟はすこまじい限りである。荒川谷でこの台風にあわなくて良かったとつくろ思つた。

身延へのバスは不通、止むを得ず雨中を徒步で土砂崩れで寸断された道を早川発電所まで歩き、折り返し運転をして、さうやく身延に辿り着いた。この後の七号首日では西山温泉は完全に孤立し、連日新聞紙上を賑わかしたが、それにつけても私は全く運が良かつたわけである。

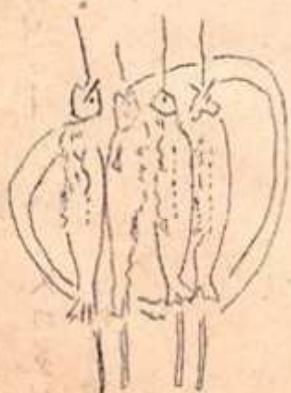
○あとがき。

一 北岳への登路としては、広河原シリ草すべり経由、荒川小屋より吊尾根経由、西保よりの左俣経由が一般化されているが、夜叉神峠の先まで自動車

通路が完成された現在、荒川の各ルートは歩きに於ける程度自信のある者には興味ある北岳への最短ルートとして推奨出来るコースである。細次については深枝才5号に丁度の紹介がある。夜行便の場合、才一日目は北沢なら出合附近、その他は広河原までゆっくり入れよう。

二、北沢はこれと言つた悪場はない。然しどにかく南下の次だけあつてかなり大きく、増水時には進退極まるから天候の判断は重要である。な

るべく数人のパーティで補助サドル位持つて行つた方が安全であろう。



女子合宿

走縦立山

一白馬～五竜



期日 8月5日～10日

江子澄 宏正
藤井井辺
大吉 富士子
小林野子
満敏子

昨夜、筒井リーダーと小林さんに見送られて出発した私達は無事に信濃四谷に到着、こゝを返す登山者の群に加わり、バスに乗ると一時間余で猿倉に近く、小屋の前で朝食をとり、早速出発する。

山腹を横伝へにゆる、道を辿るとやがて長走沢に出る。幾度か清新を頂をふり仰ぎ乍り、ようやくの思いで白馬尻小屋についた。何しろ積れぬ荷

八月五日 晴

昨日、筒井リーダーと小林さんに見送られて出発した私達は無事に信濃四谷に到着、こゝを返す登山者の群に加わり、バスに乗ると一時間余で猿倉に近く、小屋の前で朝食をとり、早速出発する。

時折り、下の方から吹き上けて来る冷い風は汗ばんだ肌にだらよく、さき程の疲車は感ぜられない。十五分に一回と言う、かなり贅沢な休みを繰りかね黙々と進む。甜碧の壁には猿がくつまみりと笑しかつた。

葱平に出ると、さすかに気も緩み、やがて長走沢に出る。幾度か清新を頂をふり仰ぎ乍り、ようやくの思いで白馬尻小屋についた。何しろ積れぬ荷

八月六日 晴

今日は後発隊の筒井、小林両娘を待つ爲に一日白馬に停滞である。天気は快晴、停滯にはもつた、ないようない日である。御来光には間に合わなかつたが早朝に白馬山頂に立つ。

眼前に横たわる北アルプスの連峰を眺め乍りその雄大さに感激の言葉もなく立ち止まることなく、山の朝であった。

以後丸山を一日中飽く事のない山

が重く、自然とテンポがゆるくなる。こんな時効を奏したのはK娘の「一二二」の号令であつた。白雲の習練の賜である。

天雪渓を眼角にかなりの休みを取った後、アイゼンを付けて出発した。

荷の軽い連中が私達をひよひよ、追抜いて行く。それでも、中に炎の毒そうに声を掛けてくれる者もあつた。

信濃四谷(五三)→猿倉(ハラ)→白馬尻
(一五・九・ナ・一・〇)→大雪渓(土・ミ・シ・ナ・ミ)
一五・九(十五・〇)→村営小屋(セ・ミ)

子岳の美しい山容を眺め、更に進むとやがて美しく、お花畑が展開する。この頃になると足取りはますく重くなる一方で、すぐそばに見える村営小屋もかなり遠く感じられた。下から登つて来た高山植物監視員に「あんた達が最後だよ」とは二の句が告げず、這々の足で村営小屋を左後に幕営する。

信濃四谷(五三)→猿倉(ハラ)→白馬尻
(一五・九・ナ・一・〇)→大雪渓(土・ミ・シ・ナ・ミ)
一五・九(十五・〇)→村営小屋(セ・ミ)

八月六日 晴

今日は後発隊の筒井、小林両娘を待つ爲に一日白馬に停滞である。天気は快晴、停滯にはもつた、ないようない日である。御来光には間に合わなかつたが早朝に白馬山頂に立つ。

眼前に横たわる北アルプスの連峰を眺め乍りその雄大さに感激の言葉もなく立ち止まることなく、山の朝であった。

以後丸山を一日中飽く事のない山

山を眺め乍らのんびりと過し、後発隊を迎えた。七貫目あまりの重い荷にもうけず、ゆうくと登つて来る二人を発見して、そのファイトに頭が下る。

明日はいよいよ後立山の縦走である

（岩井正江記）

八月七日

五時出發。朝の空気がひんやりと冷々。団リのテントでは炊事に余念がなく、丸山を越えようとや、しばらく下り、お花畠へ出たのでこ、に荷物を下す。信濃キンバイ、トウヤクリンゴウ等

と林々の花々が朝露に蘇り、生々と咲き競つてゐる。やがて径は杓子にかゝり、越中側のまだらかな斜面を捲く。

今這経験した事もない七貫目の荷物が、たゞにも重く、ヒツチが上らなか。約子の両面を降りきると再び登りと乍ら、延もやはり越中側を歩く。最高所で休て、立山、剣の嶽、岩稜、更に手前には御岳、毛勝の巻々が深々黒部の谷を隔て、そびえてかかる。そして近く唐木峯は灰褐色の雄大な山容で私達を待

つてゐる。遠く槍ヶ岳、穂高の山々の出現に、かつて登りし日の樂しい思い出を一層深めさせてくれた。鎧温泉へ降る古野、岩井さんともいよくお別れである。分歧奥で温泉に下る二人、天狗の尾根を行く私達は、つまでも手を振つた。

緩やかに登りが終き、天狗の池で小休止。此のそばに天幕が二張はられてゐる。来年の夏には此處に小屋が出来上ると、う。振り返ると、白馬三山、朝日岳がはるか後方に遠ざかつてゐる。天狗の峯までの登りを頑張る。剣が増々近づいて、岩と雪のコントラストが鮮やかに見える。

まもなく高標風の樅松疎葉に入り、此處で又一時間程登の仮眠。

天狗の大降りは、ガスが巻き出しして未たので横壁に且つ急いで下る。不帰の陥にかかる处で、御立大山岳部の人達に会う。槍ヶ岳からの縦走とか、日

出発（算）一九山（五、二三）一鎧ヶ岳（ハ・五）一鎧ヶ岳各坂（ハ・五）一不帰一峰（ハ・三五）一十日岩室（セ・シ）一岩峯（セ・四）一唐松山（五、二三）

出す頃がスカ時々切れて来る。一峰ニ峯と與所くに針金が引かれて、金子が置かれてあるので、思ひの外容易に通れた。途中あまりのんびりしてしまつたので、三峯を越る換陽は西に傾き始めた。唐松岳が目前に迫り、雪渓に動く人が見える。我々も明る、内にテントを降らなければ車はと丁さんと先を急ぐ。幾くつかのヒーフを乗り越し、黄昏迫る頃、大きなケルンの立つてゐる唐松岳に着く。七時、静かな山陰を後にテント場に掛けて一日散に下る。

心はせくばかりで、天幕を張る場所も見付からぬまま、に日が暮れてしまつた。テントを張り、夕食を消ませた時は疲労感のみが残つていた。

明日は五竜岳までと決め、シユラーフにもぐり込んだ。（小林敏子記）

（ハ・五）一鎧ヶ岳各坂（ハ・五）一不帰一峰（ハ・三五）一十日岩室（セ・シ）一岩峯（セ・四）一唐松山（五、二三）

八月八日

六時に目さしを閉けておりたのだが「あれが鍵、立山、別山」という外の声に皆目を睜してしまつた。四時半だった。鍵がぐつと近く見える。雲はあるが天氣は悪くなさそうだ。ゆく立山達峯を眺めてから木場へ降りて行つたが、朝は雪かとけて、ないので時後留つたドラム缶の水も、もう少し残つて、なかつた。朝食のおそばを食べ唐松岳を二枚カメラに收め、九時に出發した。しばらく嫌を下りが続々、石がガラガラしてるので一步一歩慎重に下らなければならぬ。荷は未だ相当重く、更に下つた處のトラバースは、鉄靴の筒井さんが一番大変だつた体だ。

尾根に出ると日が射し暑さがヤリ切れないが、鞍部ではかさが上つて来て立ち停ることすぐに寒くなつてしまつ。お先にと歩き出した人を見るとサックの後に奥焼きの網がつけてある。皆急に奥が悪くなつてしまつた。

ほんのり赤味を帯びたウスユキ草が美しかつた。だんくカスの晴れ向がなくなつて来た。石に白い円を書いた道するべが、誰かの麦わら帽に見えたりした。もう白岳ではないかと思うのになく、小屋らしいものも見えなかつた。木筒一つぶら下げた男の人が足早やに我々を追、趣して行つた。少し登つて休んでいるとその人が引返して来たので、小屋が近いか聞いて見るとすぐです。その辺まで行かはつたら見えはります」と奥西翁で教えてくれた。ところが仲々小屋が見えはらない。荷がスが濃くなつた。前方で誰か休んでる。小屋を尋ねてみると、「私もこのあたりだと四う力だからおかしいですわ」と言う意味の事を、バツテシ混りの几州弁で答えてくれたのでさつきの奥西翁で答えてくれた。

唐松小屋(九・〇) — 白岳(十三ニ) — 五竜小屋(十三ミ)

八月九日 停滯(白岳六日)

昨日吹き出した強風に今朝は雨となりだと四う力だからおかしいですわ」という意味の事を、バツテシ混りの几州弁で答えてくれたのでさつきの奥西翁で答えてくれた。明りかに白岳である事が知れた。黒節側から来る風雨はお粗末な小屋におしきもなく、ぎつけ、私達をびくびくさせた。外に出てみると急苦しく感じた。

今日は一日此處に滞ること一晩、小屋の一晩に私達は暮しへ宿に

まことに適当でない。ひどいカスヒ風が一層強くなつて來た。今夜は台風が来ると言うことだし、相談の結果小屋に入るに決めた。何年か前

物薄い台風でこの小屋の屋根が吹

さとばされたことがあつたとか。小

屋の若い人が窓の修理をやつていた

た。夕食の煮込みソーメンを食べ

明日晴れ、はキレイト小屋まで行く

事にしてシユラーフにまぐり込ん

た。(長井家子記)

を吹けた。早々四人の心はこの時、犯
罪、共に不平の山の上にあつた。

心中天氣は悪うともしない中に
風雨と共に間が小屋を包んでいた。

八月十日 下山

今朝も目を覚して見ると风雨は強か
った。れども子夜して、いた最後の日が
来て止みつた。ニコースを聞くともう
支那は海上に去つたとの事。一同は懐
中に入れた結果鹿ぐ遼見尾根を下るこ
とにした。

完全武装に身を固め外に出ると、雨
に足りたぶりもなく、しかし月は相變ら
ず空であった。しかし稜線を一步信州側
にてるじ不思議な程風が治まり、今ま
く風がうその様な気がした。ニホ
セウだと判ると五互いに顔を見合せ
てにっこり笑つた。後は雨に濡れた尾
根、走り通りノアとをひかれる
として下りて行つた。

寺の内は小降りになつて來た。が
て一列木間から谷を埋めている雪渓が
白くたつて印象的であつた。はるか下

を坐むと、危惧の所々が日に悪化され
て光つて見えた。途中増算中の遼見小
屋に立ち寄り一氣に神威取に下つた。

どうして来年はこの尾根を登るんだ、
と言う事で、百互いの心の中にひそや
かに決めていたものだった。(近藤透江)

五竜小屋(九時)→西遼見山(十時)→大
遼見山(十一時)→トヨタ山(十二時)→大
小屋(十三時)→持成駅(十六時)

——ウ——

白馬と越後と越後温泉と豪雪

八月七日

セードしながら下る。段丘をめぐら
お花畑が唯一の慰安看となつて豪
雪を祭しませてくれる。
かなり長、時間下つた頃、硫黄の
香をして来て、向もなく小屋に泊く
と思うと再びファイトが湧いて来る
。十二時小屋に着く。昼食を頂させ
て、私は宿泊する事に定める。岩井
さんを見送つてから、山の案内人に
周囲の山の説明を聞く。もう白馬の
便は遠く小さくかすんで見える。

ここでは家族連中のパーティがラ
イのに驚いた。一人ヒタツて河ヒ
サムへの縦走路へと急ぐ。急降を経ける
こと十分余りで最初の鞍部に達し、唐
松岳への縦走路と別れる。ここで鷹井
さん、迫藤さん、小林さん、辰井さん
の前途を等しく乍ら、岩井さんと二人で
左側の急な砂礫状の斜面を越後温泉へと下
つて行く。陽射しも段々強くなり、歩
きにくく、往きそれでも二人のんびりや
ジック立てる元にナリ鞍になり乍ら
危険を経ける。途中雪床があり、シリ

温泉の気分を充分味へ乍ら、頬蓋
の香りに包まれて一日は暮れていつ
た。(吉野富三郎)

後立山縦走裏話

筒井 満栄



(一) 北了ともなると日本中いろいろな外から人が集つて来る。日本語がこんなにもすかしいといふお話をある。

五竜小屋も近いと喜び勇んで歩いていた時、身軽な一人の青年がすたすと這ひ越して行く。十分もすると引返して来た。先頭の丁女史、え、もう少し行くと見えはります

かくスの中行けども行けども小屋は等々現れきれない。しばらく行くと滝々と

一週間にもわたる長い山行となると、その向の色々な苦労もさう事ながら、その裏には面白のこと珍らしことなればが付きものである。これは(二) 外筒井女史が語るこの夏の縦走裏話。

した人のおじさん、小屋はもうじきですゆ。はつてん、ほつてん。女子会員頗る見合すばかり。今もつて見えはります。とは標準語では何と言うのかと頗るひねり、遂に言葉の通じな、おじさんを、坂天くんと名付けた次第である。

重い荷物で苦しめられたもの、今回(三) の女子会員の食欲たるや、男子にもひけるとらないにちがいない。あの細い長娘たるやそのトツフではなかつたろうか。お陰で停車し乍らも、非常食料以外はされに片付け、いつまでも子は食わな、くせに多く持つて行きやするという交説を退止した。山に入つてこれだけ食べられると、山は、大いなる進歩である。ヒットツフ娘の一人言らい。

この(四) は本当の内話話である。これは本當の内話話である。七貫の荷もなうと急降下の時は大部尾りセードを便用する。坂女史を始め、N長娘とも、漁丸たるシラウニを気にしながら下つていつまでも口があき、見崩れた丁女史小屋のランブルを懶りに、サイル崩きならぬ三日目、長娘のスボンは大きくな二つの口があき、見崩れた丁女史小屋のランブルを懶りに、サイル崩きならぬ糸捌きで三つの口は見事にとどきれたもの、つまりがどうしにあじきゑしたとたん、皆残にも丁女史の苦せ外は風雨、地図の上では三年位さきの計画も出来てしまい、少々退屈したが、五竜小屋のホールと称する处に操り出してたべる。やがて小屋のお嬢に至つては、ヒニル風呂敷をへぐあとの二日向を、又とも猫とモフカ松尾皮を後生大事と下り下り、仲々の見物であつた。たゞそれもサルトにぶら下け即席尾皮を作り、皆出来上つたものを見渡めたら、今まで二人だつた小屋の二階から、トマドベと六人のアルバイトの人達が降りて来たのに驚いた。小屋の人達は

このヒーマン料理が大豪氣に入つたとみえ、浦和のヒーマン某年も来て下さる。中の一人は高校のスキーリレー選手とかで、済和のヒーマンのおかげで某年は優勝だ。とはやされて、た。この好評のヒーマンを想いで、来年は重見尾根を登ると、女子一同はりきること

山を送る

近藤道江

葉しかつた山、苦しかつた山、あまり山屋を持たない私にとつても、私なりに山の春繁草木は持つていたものだ。げんとそれと有形乍らのとしなかつたのは生来の筆意趣のせいかも知れまい。

こんな私が、去年の夏上高地で、今年の夏高の山頂で、スケッチアーツに不器用なベテランかまようになつた。

それは、夏休み中、いたずらも持たない田舎の素朴な子供達に、私の喜びを、山をどういためであつた。平生往々なれど場所からう子供達となり文通よりも、はるかに喜びが大きいので、山は年々かといふ一人よがりな方へで、今年の夏山でも、こんな計画を満たす鳥に、一日早く出合ひしめた。果せうから、山から帰つて子供達に合つて、山の話をして、と書つてさかなか終らせてしまつた。私は通り一べんの簡単な話で、その場をかかつた。私は私と子供達が来る、限り山を送り續けよと覚つた。そしてこの子供達がもつと大きく育つた時に、あるいはまた私は山を送りくるかも知れないといふ期約をかけながら

井氏への手紙

柿沼博一



峯へ良く歩きましたね。

ると君を訪ねて、テントをかついで北アルプスの山を、足根を伝わつて峯から

はつきり分らぬ、敷前兄が山がせきで、中學二年漢を谷川岳につけられて行つてくれた時の印象が、敗戦後、空日を心のこころにちらつと頭にもたげたのでは、でしようか。それで山でも三つぞ兄どうじもへて登つたんだろうと思ふます。

因んでて山があり、そこには美し

を見ると、かしこ地下足袋とは、竿の買出しに伏フたりユックをして、竿の買出しに伏フたりユックを

い高山植物ミツバチを考えることの余裕を持たせて、放して、勞力ヒヤ山の上に寝て仰天する壁空とがあつた。

洋服一早速御手紙有難う。久し振り

りこの夏は君と山行を共に出来る事を楽しみにして居ます。会社は休暇をとるのがむづかしかった様ですね。この秋にはよく結婚されるとのこと。あめどう。

僕は相變らず、せつせと山に登つて居ます。近頃は岩登りもやつて、いるの

かって、三十度まで岩登りを始めたるて、岩登りいたらしくね。山岳会の若

い入下りヒーブに三十の手習いを始めました。君が一緒に放臭だった頃は、

車を走らせる音で、夏休みにな

る君を訪ねて、テントをかついで北アルプスの山を、足根を伝わつて峯から

はつきり分らぬ、敷前兄が山がせきで、中學二年漢を谷川岳につけられて行つてくれた時の印象が、敗戦後、空日を心のこころにちらつと頭にもたげたのでは、でしようか。それで山でも三つぞ兄どうじもへて登つたんだろうと思ふます。

これになら、もう山なんか行くものか
と見切りをつけてしまつたろうに。事
実僕が知つてゐる人で、最初の山行の
べき音で風雨と空さでひとり目に会い
山登りはもつと前に御覧だという人が
いう。僕もさうであつたら、ピーラハ
ンターとならず、ラルハンターにでも
なつて、この年で一人者で、山登りな
どしていなかつたろう。まして今原岩
登りなどは、多くの場合最初の出だし
が万回を決めてしまつて運命を待つてい
るわけ。

その八ヶ岳山は、晴れて展望がきけ
ば勿論のこと、ガスに包まれても、雨
にかられても、波打て辛くとも、山は
良、ものとして他の生活に入つて来て
空気を嘗時にほめ、とした希望を
もたらしてくれた。山へ逃避の場所
を求むたのです。

しかし日気が弱いの、一人で高、山
へ行くは全然たつて、友達を誘
つて初心者の僕が大蔵を背負つて、翠
洞窟を出て先端をとめた。時には

槍ヶ岳や穂高岳を見下すと、さうい
う林立岩壁を、サイルを伏せて上へ登
つて来る人を、ふじうと敬意をもつて
て見た。自分も登つてみたいが、とても
も出来るものでもなく、特殊な人の才
もする平だと思つて羨やましく眺めた。そ
して相愛らす室内書を見ては高さを平
め、上から天々岩壁を眺めては、何時
かは波打水につかり、岩肌に手を下れ
て、全身を山にぶつけられた、と思つ
た。君ヒ一語に行つた時も、頂上に立
つて黙つて山を眺めていた時は、そん
な事を考へていたのです。そう想ひ乍
らも大きなピーラハンテンが十年も続
いた。だがその間に私の山に対する気
持も次第に変つて来た。敗戦後の空虚
な心を満たすための一時的な逃避行で
あつたものが、次第に生活の担当の部
分を占め始め、生涯の心の糧として自
分の登山を本物にして行きたいと思う
ふうになつて来た。そんな折に、私は
訪問して現在の山岳会に籍を置く林を
車に乗りたのです。

槍ヶ岳や穂高岳で見下すと、さうい
う林立岩壁を、サイルを伏せて上へ登
つて来る人を、ふじうと敬意をもつて
て見た。自分も登つてみたいが、とても
も出来るものでもなく、特殊な人の才
もする平だと思つて羨やましく眺めた。そ
して相愛らす室内書を見ては高さを平
め、上から天々岩壁を眺めては、何時
かは波打水につかり、岩肌に手を下れ
て、全身を山にぶつけられた、と思つ
た。君ヒ一語に行つた時も、頂上に立
つて黙つて山を眺めていた時は、そん
な事を考へていたのです。そう想ひ乍
らも大きなピーラハンテンが十年も続
いた。だがその間に私の山に対する気
持も次第に変つて来た。敗戦後の空虚
な心を満たすための一時的な逃避行で
あつたものが、次第に生活の担当の部
分を占め始め、生涯の心の糧として自
分の登山を本物にして行きたいと思う
ふうになつて来た。そんな折に、私は
訪問して現在の山岳会に籍を置く林を
車に乗りたのです。

槍ヶ岳や穂高岳で見下すと、さうい
う林立岩壁を、サイルを伏せて上へ登
つて来る人を、ふじうと敬意をもつて
て見た。自分も登つてみたいが、とても
も出来るものでもなく、特殊な人の才
もする平だと思つて羨やましく眺めた。そ
して相愛らす室内書を見ては高さを平
め、上から天々岩壁を眺めては、何時
かは波打水につかり、岩肌に手を下れ
て、全身を山にぶつけられた、と思つ
た。君ヒ一語に行つた時も、頂上に立
つて黙つて山を眺めていた時は、そん
な事を考へていたのです。そう想ひ乍
らも大きなピーラハンテンが十年も続
いた。だがその間に私の山に対する気
持も次第に変つて来た。敗戦後の空虚
な心を満たすための一時的な逃避行で
あつたものが、次第に生活の担当の部
分を占め始め、生涯の心の糧として自
分の登山を本物にして行きたいと思う
ふうになつて来た。そんな折に、私は
訪問して現在の山岳会に籍を置く林を
車に乗りたのです。

たのを感じた。しかしそう嬉しいの中

に、恐怖感で小さくなっていた自分の

いくじなことを、勇めて元気つけられた

にがさく、登り方に付する梅とがあつ

た。それからいくつかの決まりをやり

て、岩場七何回かやりました。大自然の

スケールに呑まれて、小さくなってしま
う自分を發見する群衆は、どうしよう
もありませぬが、これは自分に対する

斗争で、斗争の中に強く窄めて行く
ものと思ふます。そして今度こそは、
技術や未熟な僕なりにすつきりした山
登りをしようと思うのです。

最近つくづくと感する事は、本当の
山登りとは、何とも手かしいものだう
うと言ふことです。この夏休みには、
君が渓流のベテスに来る前に、会の人
と渓谷のクラック尾根やその他、ぐつ
かの磯島の岩場を分る予定ですが、食
い山登りをして、すつきりした気持ち
君を連れた、と心の準備をしてあります。

△仲間を語る△

柿さんのこと

・山崎 昌彦

略称・柿さんは会の最年長者で、
あると同時に景モ若々しくアルビニ
ストである。山行に詰われて断わり
たためしのないあの山への覚悟、そ
してライイトは皆の知る通りである
が、例へば折角ペテラン丁兵が連れて
行くとしても、そこで機会を利用
しようとしない平令だけも、諸君、

柿さんを見習ったままで居た。

柿さんの山道は山又始の天山
ではなく、自分でほんのた山である
。そして更に天山と標記。雨の日も
同の日も滝面をもべらべつては
飯食の飯を炊き、そこ抜いた手布に
くるまつて震ふるむる寒るのをあた
り前とした時代の趣と同様がある
。

ベースヒーター装着の柿さんの馬力は

大したもので、何でも石、巻以上に

荷を背負い、カツリ歩く姿は、庄

歎の古つたもの、さうたところであ

る。なかく同年頃の良き同行者が

得られなかつ七私にして、柿さん

が同じ山場にまく歩いたとゆのであ
つた。山行を六月七日には終了正

月が最初だったと見えうが、以降柿

さんは私の行動に極まるが、私は彼

の見本をうべき行為に恥じ、それをが

らも、随介二説に歩いて未だ、

山の計画の段では結構しゃべる娘

は、平生は手を異口ぞみ、てかほ

山男に共通するされ味で徹底的女性

格とも顕れてしまして、その上に子供が

うるうる分別してがむかつていいのか
と知れな。

あの今別奥さん、アガールで

年、ものと良い何かによつて、打版
られる日の近づくほどを切とる

会 務 報 告

山詫公の記錄（四月～八月）

▲四月八日（水） 於市川食堂二階

△出席者：神沼、山東、山泉、高井、吉野、辻、菅野
（篠崎、山崎、尾上、村田、百藤、栗原、
楠山、高倉、長井、松井）（十七名）

一 新役員左記の通り。

会長 吉田泰彦

副会長 筒井満次

会計 山東昌彦（補佐） 篠原健二

装備 辻勝四郎 龜江寅之

会報 篠崎介二 近藤澄江

庶務 肴藤良則 楠山正敏

選対 村田俊満 辻勝四郎

一 山行計画

谷川岳合宿 五月三日～五日

（食料係：竜江）一食50円徵集

△会運営上の諸問題

△会員の件：新年度より月額二百円

△

一 市垂連主催：山道試験、件

（期日：6月27日、夜於市垂主催）

一 市垂連合団集中登山の件

▲六月五日（水） 於事務所

△出席者：神沼、山東、山泉、高井、栗原、
（篠崎、山崎、尾上、村田、百藤、
楠山、高倉、長井、松井）（十七名）

一 山行計画

（谷川岳第一回合ニルンビ：肴藤

（谷川岳ヒツア！天：吉田

（七月九日（木） 於事務所

△山岳映画の件：会員外、不スノイ
（朝不リ既存）

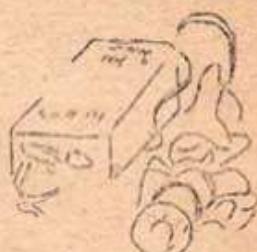
△会員の件：新年度より月額二百円

△会員の件：新年度より月額二百円

1958年度山行一覧

(昭和33年4月1日より34年3月31日までの間に報告のあつたもの)

期日	場所	コース	メンバー
4.6~12	西丹沢	モチコシ沢、御怪沢、箱根沢 鳳凰三山	辻、龜江、 柳沼、山岸、筒井、藤崎
5.3~4	南アルプス	御座石一鳳凰一夜叉神峠	辻(単独)
5.4~5	*	御座石一鳳凰一夜叉神峠	(高尾部)
5.3~5	西丹沢	箱根沢、足尾沢、天子沢、下柳沢	辻、村田、森原、庵沢小山田、柏原、 大武、齊藤、星野、小林、野田、 辻、齊藤、 辻、齊藤
5.10~11	武甲山	(奥多摩連登山大会)	大武、齊藤、星野、小林、野田、 辻、齊藤、 辻、齊藤、 辻、齊藤
5.17	谷川岳	一の倉ニの沢右俣	辻、齊藤、 辻、齊藤、 辻、齊藤
5.18	*	一の倉中央壁	辻、齊藤、 辻、齊藤
5.25	*	九合一白毛門一室ヶ岳一清峰	山岸、筒井、柳沼、石川、 村田、齊藤(夫)、高須賀、小林、 辻、森原、柏原
6.7~8	尾瀬	大清水一燧岳一清水平	筒沼、山岸、辻、藤崎、 山岸(单独)
6.8	谷川岳	一の倉アルパールンゼ	筒沼、山岸、辻、龜江、 齊藤、森原、小山田、 柳沼、小林
6.16	*		辻、辻(夫)
6.28	*	白毛門沢一白毛門山一白谷	山岸、筒井、辻、龜江、 齊藤、森原、小山田、 柳沼、小林
6.29	*	一の倉5ルンゼ	辻、辻(夫)
7.6	*	ヒツゴト沢	山岸、筒井、辻、龜江、 齊藤、森原、小山田、 柳沼、小林
7.20	*	一の倉アルパールンゼ	辻、辻(夫)
7.23~8.3	南アルプス	金山(駒~尤岳) 仙丈岳~兩俣	山岸、筒井、 藤崎
7.27~8.2	*	三枚峠~燧見~北岳	柳沼、菅野
8.1~9	*	理苗~荒川岳~二軒小屋	龜江、利田
8.5	谷川岳	オノカ沢	辻
8.5~7	北アルプス	稻庭岳、奈良岳	筒井、吉野、也藤、小林、石川、 森原、高須賀、齊藤(夫)
8.5~10	*	白馬岳~御嶽下峰	辻、吉田、辻(夫)、龜江、齊藤、森原、 而原、浅次
8.15~20	谷川岳	一の倉一ガ沢	柳沼、辻(夫)、西田、山崎、龜江、 吉野、近藤、岩井、齊藤、庵沢高須賀、 柳沼、辻、森原、柏原
8.18	*	ごく白沢	柳沼、辻(夫)、西田、山崎、龜江、 吉野、近藤、岩井、齊藤、庵沢高須賀、 柳沼、辻、森原、柏原
8.19	*	白毛門山	柳沼、辻(夫)、西田、山崎、龜江、 吉野、近藤、岩井、齊藤、庵沢高須賀、 柳沼、辻、森原、柏原
8.30	*	白毛門松木沢	柳沼、辻(夫)、西田、山崎、龜江、 吉野、近藤、岩井、齊藤、庵沢高須賀、 柳沼、辻、森原、柏原
9.7	*	御嶽沢牛一ルンゼ	柳沼、辻(夫)、西田、山崎、龜江、 吉野、近藤、岩井、齊藤、庵沢高須賀、 柳沼、辻、森原、柏原
9.14	安房山	鹿岳日次	辻
9.21	心川岳	一の倉・アルパールンゼ	辻、藤崎
9.21	*	天令沢	山崎、筒井
9.21	安房山		村田
10.2~3	中央アルプス	駒ヶ岳へ空木岳	辻、龜江、柴野、森原、 柳沼、山岸、筒井、吉野、辻(夫)、菅野
11.30	妙義山	(會同登山)	田中、高倉、楠山、森原、小林、長生、石川
12.7	筑紫山	(冬山合宿復興)	辻、楠山
12.21	谷川岳	西黒尾根	山崎、柳沼、大武、筒井、辻、菅野、齊藤、 辻(夫)、森原、小林、野田、東、櫻井
12.26	武尊山	(冬山合宿)	辻、楠山
12.27~1.1	*		山崎、柳沼、大武、筒井、辻、菅野、齊藤、 辻(夫)、森原、小林、野田、東、櫻井
2.22	谷川岳	西黒尾根	辻、山岸、村田
2.22~25	*	一の倉一の沢~東尾根	辻、楠山



葉である。冬山の雪もまだ残る中、
喜びを感じる五月初谷川岳登山に、
女子会員も参加出来たことはほうことは
ないことである。

△岩に尾張に

△四月の戸田山とモラウ山の二日

△雪の中マ
あの面白な雪の中に我々の足を一步
一步、武尊の頂上に向けて歩いていた。
今年の冬山、しかも全員参加と全員登
頂という事が我々の冬山への信心と言

欲を高める上に大きなアラスだつたと
思ふ。前述ヤンフで長さんの靴が渾
り付いて、一晩中靴をはき通したつた
こと、夏天幕で耐寒訓練をしたことなど
うちに、また冬山を迎える季節となつ
た。

△春山谷川にマ

△五月の谷川岳、何でもすい言葉の林
であるが、山に登る者にどうしては何か
荷物を帶びたまゝかしい味がある言

私は今後も受け継いでやつていかね
ばならぬ変ほんなりである。室山
と同様に、余りで技術向上することをな
く、この仕事をおつて内容的にもス
マートな技術へ向けて磨いて行つて
いただき。

今回は原稿の集めは良かつたが草
稿その他の改訂の手直もありて、配
本オーダー数から原稿が随筆の類は
これを割合させてもらつた。御了承
下さる。(終)

年次	第十一号
発行日	昭和2年2月10日
主行目	新潟県立秋田童心 ホルヒモ吉田高砂町五十九
編集	吉田高砂町五十九
著者	吉田高砂町五十九

△会報の發行は一つの意味んだした
と言う。余れをい自分等にとつては、そ
れは大仕事であり苦労である。だがこ

△
溪 稜 山 岳 会

溪 稜 山 岳 会

埼玉県浦和市高砂町 5-89